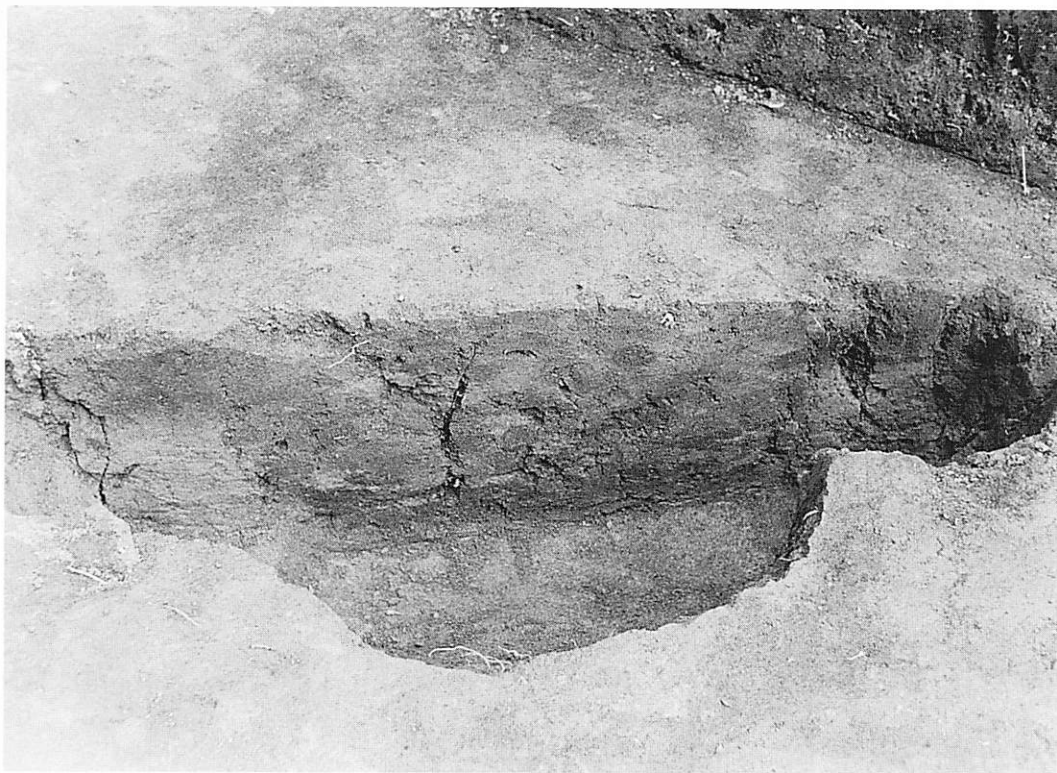


# 長野県埋蔵文化財センター年報16

1999

財団法人長野県文化振興事業団  
長野県埋蔵文化財センター



照月台遺跡旧石器時代の土坑



長峰遺跡全景（西上空より）

# 序

当センターが独立した財団法人として発足した昭和57年以来取り組んできた高速道路関連の事業は、本年度刊行した発掘調査報告書をもって、ひとまずの区切りとなりました。18年の長期間にわたった事業だけにひとしおの感慨を覚えます。この間に刊行された多数の報告書は、長野県だけでなく日本の考古学研究の進展に大きく寄与するものと自負しております。

その一方で、発掘調査事業は本年度から新たな展開を迎えました。昨年度以来取り組んで参りました県営圃場整備事業関連や、県単農道整備事業関連、国営アルプスあづみの公園関連事業に加えて、新たに高規格道路建設事業関連、国道バイパス関連などの調査が始まりました。これらの事業は県内各地に分散しており、当センターも全県的な対応を求められることになり、名実とも長野県の埋蔵文化財センターとして、飛躍することが求められるに至りました。こうした期待に応えるべく、研鑽に努めてまいります。

当センターに対するもう一つの期待は、普及・公開活動でありましょう。本年度は長野県立歴史館や長野県民文化会館を会場とした企画展だけでなく、県内各地に会場を借り、市町村教育委員会の調査資料も含めた展示会をいくつか実施しました。これからは全県的な視野に立った普及活動にも力を注ぐ所存です。

本書は平成11年度に当センターが実施した事業の概要をまとめたものです。ご参考となれば望外の喜びです。

日頃より当センターの事業にご協力・ご指導いただいている関係各位にお礼申し上げますとともに、一層のご支援をお願いする次第です。

平成12年3月

長野県埋蔵文化財センター

所長 佐久間 鉄四郎

# 目次

口絵写真

照月台遺跡旧石器時代の土坑（上）

長峰遺跡全景（下）

序

目次

I 発掘調査及び整理作業の概要…………… 1	12 更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河 原遺跡……………21
1 川久保遺跡…………… 3	13 松原遺跡……………23
2 仲町遺跡…………… 4	14 川田条里遺跡……………25
3 照月台遺跡…………… 5	15 日向林B遺跡・貫ノ木遺跡ほか…………27
4 貫ノ木遺跡…………… 7	II 普及・公開活動の概要
5 駒込遺跡…………… 9	1 現地説明会……………29
6 矢出川遺跡……………10	2 展示会等……………29
7 ヤセヲ遺跡……………10	3 指導・研究会・学習会……………31
8 山の神遺跡……………11	4 刊行物……………31
9 長峰遺跡……………13	III 機構・事業の概要
10 箕輪遺跡……………17	1 機構……………32
11 川路大明神原遺跡……………18	2 事業……………32
	平成11年度役員及び職員

# I 発掘調査及び整理作業の概要

平成11年度の発掘調査は県営圃場整備事業関連・農道整備事業関連・国営公園関連・高規格道路関連・国道バイパス関連・ダム建設関連の諸遺跡を対象とした。整理作業は上信越自動車道関連・国道バイパス関連遺跡を対象とした。概要を以下の一覧表に示す。

## (1) 発掘調査

発掘調査のうち8遺跡は記録保存の本格調査、3遺跡は確認調査である。記録保存調査のうち駒込遺跡と山の神遺跡が昨年来の継続調査、それ以外は新規の遺跡である。駒込遺跡は2年越しの発掘調査を終了させた。山の神遺跡は記録保存3年目で、12年度で発掘終了の計画である。公園設計の中にいかに遺跡を活用できるかも、最終年度の課題である。乳川古堤防遺跡は測量主体の調査で、短期間で終了した。長峰遺跡は2年計画の記録保存である。12年度発掘終了の予定で、本年度は順調に進行した。しかし、八ヶ岳西南麓屈指の大遺跡なので、来年度は大きな成果が期待できる反面、工事工程との調整など困難も予想される。川路大明神原遺跡は確認調査を含めての記録保存で、発掘調査期間は2～3年の計画である。用地買収が残っている筆がかなりあり、確認調査ができなかった区域が残ったが、記録保存の方は順調に進行した。信濃町の国道バイパス関連遺跡はすべて隣接しており、調査は一体的に実施する。発掘調査期間は今後3年と計画しているが、本年度のところは順調である。

確認調査のうち矢出川遺跡は試掘の結果1地点しか遺物が認められず、本年度工事着工区域も遺物が確認できなかった。現道路敷の掘削には立ち会い調査を実施したが、やはり遺構・遺物は発見されなかった。ヤセヲ遺跡は用地買収ができておらず、一部分の確認調査にとどまったが、調査範囲からは遺構・遺物は発見されなかった。箕輪遺跡は広範囲から遺構・遺物が出土したので、12年度以降に規模の大きな記録保存調査が計画されることになった。

### 国道18号野尻バイパス関連

所在地	遺跡名	調査対象面積 m <sup>2</sup>	契面 面積 m <sup>2</sup>	約 積 面積 m <sup>2</sup>	調査 面積 m <sup>2</sup>	調査延 面積 m <sup>2</sup>	調査期間	調査 員数	調査 状況	主な検出遺構	主な出土遺物	次年度以 降調査面 積 m <sup>2</sup>
信濃町	川久保	6,000	6,000	1	6,000		11/5/10 ～11/10/8	2	終了	古墳時代遺物集中	縄文土器、土師器、石製模造品、金環等	0
信濃町	仲町	16,960	1,360	2	2,720		11/9/15 ～11/10/29	1	継続	旧石器時代ブロック	ナイフ型石器等	15,600
信濃町	照月台	3,030	3,030	2	4,830		11/5/10 ～11/9/15	3	終了	旧石器時代ブロック 礫群、土坑等	ナイフ型石器、石斧、 スクレイパー等	0
信濃町	貫ノ木	1,470	1,470	2	2,940		11/7/10 ～11/10/29	3	終了	平安時代竪穴住居 旧石器時代ブロック	ナイフ型石器、石斧、 土師器、須恵器等	0

### 農道整備事業関連

浅科村	駒込	6,000	1,400	1	1,400		11/5/24 ～11/8/27	2	終了	縄文時代竪穴住居、 古代竪穴住居等	縄文土器・石器 古代～中世の土器等	0
南牧村	矢出川	未定	63	1	63		11/4/19 ～11/4/29	2	継続	試掘調査	旧石器時代剥片	未定

国営アルプスあづみの公園関連

大町市	山の神	35,950	2,000	4	4,000	11/8/9 ~11/11/30	2	継続	縄文時代方形区画石列、竪穴住居、土坑等	縄文土器、フレイク石器等	2,000
大町市	乳川堤防	40,000	400	1	400	11/9/13 ~11/9/22	2	終了	近世石堤	なし	0

下諏訪ダム建設関連

下諏訪町	ヤセラ	3,000	72	1	72	11/12/13 ~11/12/14	2	継続	試掘調査 なし	なし	3,000
------	-----	-------	----	---	----	-----------------------	---	----	------------	----	-------

県営圃場整備事業関連

茅野市	長峰	32,000	20,650	2	21,240	11/4/1 ~11/12/28	3	継続	縄文時代集落	縄文土器・石器、土偶、翡翠製垂飾等	11,350
-----	----	--------	--------	---	--------	---------------------	---	----	--------	-------------------	--------

国道153号伊那バイパス関連

箕輪町	箕輪	36,000	900	1	900	11/12/6 ~11/12/10	2	継続	試掘調査 水田跡、竪穴住居等	弥生土器、杭等	36,000
-----	----	--------	-----	---	-----	----------------------	---	----	-------------------	---------	--------

一般国道474号飯喬道路関連

飯田市	大明神原	45,000	22,500	1	22,500	11/5/17 ~11/11/19	3	継続	縄文時代竪穴住居 陥穴、土坑	縄文土器、土偶 石器等	25,000
-----	------	--------	--------	---	--------	----------------------	---	----	-------------------	----------------	--------

(2) 整理作業

上信越自動車道関連で残っていたすべての遺跡の原稿執筆をもって整理作業を終了し、報告書を刊行した。また国道403号線土口バイパス関連の報告書の印刷・刊行を終了させた。駒込遺跡は整理作業を終了させ、印刷・刊行業務だけを次年度に持ち越した。

事業別	所在地	遺跡名	作業内容
上信越自動車道	小諸市	郷土・岩下・三田原ほか	報告書刊行
	更埴市 長野市・信濃町	更埴条里・屋代ほか 松原・川田条里・日向林B・貫ノ木・東裏ほか	原稿執筆・報告書刊行
国道バイパス	更埴市	屋代・大境	報告書刊行
農道整備	浅科村	駒込	接合・実測・図版作成

## 1 川久保遺跡（国道野尻バイパス関連）

所在地：上水内郡信濃町大字野尻字野尻917-1ほか

調査担当者 西山 克己

調査期間：平成11年5月10日～10月8日

白田 広之

調査面積：6,000㎡

遺跡の立地：丘陵斜面～氾濫原性低地

時代と時期：縄文時代前期～平安時代

遺跡の特徴：土器集中地点

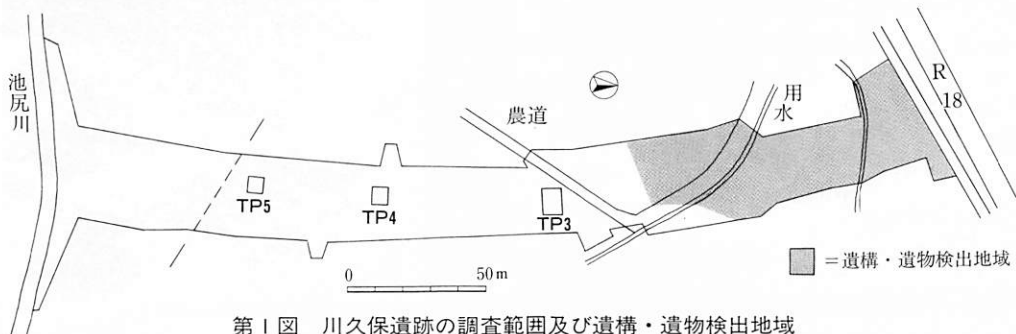
主な検出遺構：土坑、土器集中

主な出土遺物：縄文時代前期～後期土器、弥生時代中期～古墳時代後期土器、石製模造品

今回の調査では、これまで信濃町では皆無とされていた古墳時代を中心とする遺構や遺物が確認され、遺物については、特に4世紀代や5世紀代の土器が非常に多く出土した。またこれらの土器とともに、僅かではあるが土錘や紡錘車などの生活用具や滑石製の石製模造品・銀環と言った祭祀具や装身具も出土したことから、今回の調査では竪穴住居跡などの遺構は確認されなかったものの、当地域にムラが形成され人々が生活したであろうことがわかった。また信濃と越後の国境（くにざかい）であり、峠越えの出入り口であることから、難所を越えるにあたり、安全を祈願した祭祀（マツリ）が行われ、さらに情報交換を目的とした中継点的な小規模なムラが形成され、そのムラ空間の一部である水辺部分が調査されたものと考えられる。

今回の調査範囲のうち、これら遺構や遺物が検出されたのは、調査区北側の約2,200㎡であり、特に足場も無いほどに遺物が集中していたのは、その中でも北端の約1,000㎡の範囲であった。その他の範囲については3カ所にテストピットをあけて遺構や遺物がないことを確認したが、安全面上調査限界を越える地表下5m以下の3万年以前の遺跡の存否については確認できなかった。

今回の調査地はほとんど池尻川低地にあたり、ナウマンゾウがいた4万年前には湖の一角であり、のちに湿地、さらには低地となったことがわかった。農道を挟んで北側は、縄文時代前期以降、水辺が生活空間の一部となり、古墳時代後期までの間に、その空間が広がっていったようである。農道を挟んで南側は、現地表下約70cmから調査限界の約5m下までは、湿地性植物が体積したピート層となり、その間に7層前後の厚さ2cmから25cmほどの火山灰が堆積していることが確認され、湿地化が継続していたことが確認された。テストピット3では地表下約3.5m付近に厚さ6cmほどの始良丹沢火山灰（AT）を確認することができた。



第1図 川久保遺跡の調査範囲及び遺構・遺物検出地域

## 2 仲町遺跡（国道野尻バイパス関連）

所在地：上水内郡信濃町大字野尻字上ノ原525-9ほか

調査担当者：田中正治郎

調査期間：平成11年9月15日

～10月29日

調査面積：2,720㎡

遺跡の立地：丘陵上の平坦面

時代と時期：旧石器時代後期

遺跡の特徴：石器集中地点（ブロック）

主な検出遺構：上記ブロック

主な出土遺物：石器（ナイフ型石器、スクレイパー等）、剥片、土師器



第2図 仲町遺跡ガソリンスタンド北地点

仲町遺跡は照月台遺跡の北側に続く広大な遺跡で、信濃町教育委員会や野尻湖発掘調査団等により幾つかの地点で調査が行われてきた。今回は国道バイパス建設に伴う一連の調査の初年度にあたり、最南端の一里塚北地点から国道と旧道の分岐地点付近までを断続的に調査した。今年度の調査範囲は現国道を拡幅してバイパス化する部分のため、幅3～5メートルという極めて狭長な調査区となったが、ガソリンスタンド北地点と仮称した地点で濃密な石器集中地点を検出したほか、幾つかの地点でもフレイク等を確認した。

仲町遺跡の中心は、より北側の国道分岐点以北にあると予想されており、バイパスもこの地点を通過するため、来年度以降の調査が期待される。

## 3 照月台遺跡（国道野尻バイパス関連）

所在地：上水内郡信濃町大字野尻字上の原516-7ほか

調査担当者：田中正治郎

調査期間：平成11年5月10日～9月15日

伊藤 友久 山崎まゆみ

調査面積：4,780㎡

遺跡の立地：谷部の低湿地と丘陵上の平坦部

時代と時期：近世、縄文時代～後期旧石器時代

遺跡の特徴：近世の道址、縄文時代の土坑（陥し穴）、集石址、旧石器時代の石器集中地点（ブロック）、礫群、土坑

主な検出遺構：縄文時代の陥し穴 33基

旧石器時代のブロック、土坑1基

主な出土遺物：縄文土器、石器（剥片先頭器、石斧、



第3図 調査風景



ナイフ型石器、スクレーパー等)、剥片



第4図 照月台遺跡出土の石器

本遺跡は、野尻湖遺跡群の一角、貫ノ木遺跡と仲町遺跡の中間に位置している。南から小規模な谷地形を埋積した低湿地と、一里塚へ続く丘陵上の平坦部に立地するが、谷を臨む丘陵上の平坦部が遺跡の主体となる。層序はI・II層黒色土、III層モヤ(漸移層)、IV層黄褐色ローム、Va層黒色带上層、Vb層黒色帯中層、Vc層黒色帯下層、VI層粘土化した黄褐色ローム、赤褐色スコリア層……と続く。また、IV層とV層の

境界付近にはATが分布する。

**低湿地** 調査区を横断するトレンチ調査の結果では、1m以上にわたってI・II層黒色土が厚く堆積している。下層は黄褐色の風化礫を多く混入する粘性土層(水成層)に漸移しており、旧石器時代の遺物包含層であるIII～V層は存在しない。黒色土中からは縄文時代前期の集石と礫・土器集中部分を検出したが、出水がひどく精査は困難であった。縄文時代早期～前期の土器破片を多く出土したが、明確に遺構に伴うものはない。

**平坦部** 遺跡の主体は、過年度信濃町教育委員会により調査された地区の西側にあたる。

II層中に、幅50cm前後の帯状の堅緻面が何条か検出され、これらは断続的に一里塚方向に延びている。覆土は白色粒子を多く含み、光沢のある堅緻な黒色土で、硬度計による計測では30前後の高い値を示している。信濃町教育委員会による一里塚の調査でも同様の遺構が検出されており、黒色土の平均的な硬度が18～19であることから、道として機能した可能性が高い。

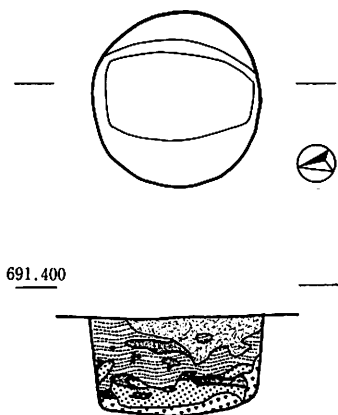
覆土上面より、元豊通寶、寛永通寶2枚が出土している。

III層上面では縄文時代の陥し穴が33基検出され、なかでもこの地域では初めての、細長いタイプ(いわゆるTピット)7基が目ざされよう。検出面での長さは140～190cm、幅15～25cm、深さ40～85cmで、長軸はほぼ南北方向を示し、並列する状態も確認された。近隣では飯山市上野遺跡、照丘遺跡などでも同様のピットが報告されており、今後の比較検討を待ちたい。

石器類は主にIV層～V層にかけて出土し、礫を含め、約4,000点を数える。剥片尖頭器1点、局部磨製石斧6点の他、調査時点で確認された明確なツールはナイフ類、スクレーパー類が多い。出土した石器が未整理のため明確でない部



第5図 安蒜先生指導



第6図 SK25平・断面図（1：40）

分が多いが、視覚的には3カ所程度の石器集中地点（ブロック）が確認できた。これらはかなり近接しているため、また調査区の制約もあり、現段階では、全体として大きなブロックの一部分の可能性も考えられる。

今回の調査において最も大きな発見は、この地域では初の旧石器時代の土坑SK25（第図）である。V a層上面で検出された土坑は、上面が直径約90cmのほぼ円形、底面はおおむね水平で、短軸30～50cm、長軸70cm前後の楕円～胴張り長方形を呈する。深さは約50cmを測り、赤スコ層と呼ばれる岩盤に近い堅い層を7cmほど掘り込んでいる。底面、内壁などに特殊な施設は見られなかった。覆土は全体にブロック状の堆積が認められ、締まりのない土で充填されている。この覆土は、科学分析用のサンプルを除きすべて水洗したが、周囲から紛れ込んだと思われる小さなチップ2・3点を検出したのみで、特に遺物は確認できなかった。また、覆土全層にわたってATが検出されている。本土坑の性格については陥し穴、貯蔵穴、墓坑が考えられるが、今後科学分析の結果を待って考察したい。

その他の遺構としては、小規模な礫群が3カ所ほど検出されたが、ここからの炭化物等はほとんど検出されていない。

一里塚 前年度信濃町教育委員会が発掘した部分の下層について、継続してトレンチによる調査を実施した。埋設管などの攪乱を受けており、IV層以下は比較的安定しているが遺物はきわめて希薄で、上層から2点の石器が出土したにすぎない。

#### 4 貫ノ木遺跡（建設省国道18号野尻バイパス関連）

所在地：上水内郡信濃町大字野尻 調査担当者：田中正治郎、山崎まゆみ、伊藤友久  
調査面積：2,940㎡ 調査期間：平成11年7月10日～10月29日

遺跡の立地：南北に伸びる丘陵の東斜面に立地

検出遺構：石器集中地点一カ所、竪穴住居址1軒（平安時代）

出土遺物：石器、縄文土器（早期、前期）、土師器、須恵器、墨書土器、陶磁器

調査の概要：今回の発掘調査範囲は、貫ノ木遺跡の最北端部に位置し、昨年度報告の一般国道18号線（野尻バイパス）に所在する。地形的には、東の野尻湖側の神山と西の池尻川に沿い南北に伸びる丘陵の東斜面に立地し、東北側は照月台遺跡を隔てる小規模な谷、西側は丘陵上の平坦部へと続いている。現況では中央部が最も低く、傾斜が緩やかで、南北に向かうにつれ傾斜がきつくなる。現国道18号線は東側の小規模な谷を貫き通過しており、今回の調査はこの拡幅・バイパス化工事に先立つものである。

層序：当センターによる過年度調査の結果と同様、基本土層Ⅰ・Ⅱ層黒色土、Ⅲ層モヤ（漸移帯）、Ⅳ層黄褐色ローム、Ⅴa層黒色带上層、Ⅴb層黒色帯中層、Ⅴc層黒色帯下層、Ⅳ層粘

土化した黄褐色ロームとする。II層中には赤色化した火山灰土が一部に見られる。III層までは調査区域内の全面において認められたが、IV層以下傾斜面側において欠落する層位が多く、遺物量が多いとされるV層が分布しない地域もかなり広い。また、遺跡中央部付近では傾



第7図 調査風景

斜による流出・再堆積がみられ層位的には遺物をとらえることは困難であった。

**出土遺物：**出土石器の整理がほとんど進行しておらず、詳述には至れないが、石器類は約2,000点を数える。調査時点で確認された明確なツールはナイフ類、スクレイパー類がほとんどで、照月台遺跡に近い内容を持つ。槍先形尖頭器1点、局部磨製石斧も3点出土し、細石刃に近い細長の剥片も見られたが、明確な細石刃核は確認していない。照月台遺跡に比べてかなりツールの割合が高く、そのほとんどが黒曜石製と思われる。器種組成や石材については今のところ不詳とする。なお、竪穴住居址（平安時代）から墨書土器が出土している。

**検出遺構：**石器集中地点に関する状況判断は、今のところ未整理のため明確な見解が出せない。ただ、現場段階においては二カ所程度のブロックが確認されたが、これらは層位的に明確ではない。また、調査区域内の傾斜の緩やかな箇所より多くの石器が認められ、良好なブロックを想定したが、調査経過と共に急傾斜となり、転石と思われる礫も多く、再堆積の性格を疑うものである。平安時代に属する竪穴住居址と思われる遺構が1軒、緩斜面より確認されている。この遺構は、ロームマウンド上に構築したと思われるが、住居址の壁面を留めておらず、構築時の掘方も認められていない。本遺構が住居址とすれば、調査区域外西側に集落域の分布が推定される。

**まとめ：**今回の発掘調査は、国道の拡幅工事に伴うもので、地形的な制約によるものか、当初予想したほどの遺物の密度にはなかった。遺物の多くは、調査区域中央部、つまり小規模な谷状の地形に見られ、周辺から流入したことも考えられる。やはり、遺跡の主体部は丘陵上の平坦部にあり、今回得られた遺物の多くは様々な要因でそこから移動したと思われる。

## 5 駒込遺跡（県単農道整備事業関連）

所在地：北佐久郡浅科村桑山字駒込  
173-8ほか

調査担当者：川崎 保、上田 真

調査期間：平成11年5月24日～8月27日

調査面積：1,400㎡ 遺跡の立地：丘陵地

検出遺構：竪穴住居跡縄文時代中期3軒、  
古代8軒 掘立柱建物跡中世3  
棟 土坑約400基 石組み遺構  
1基 溝4本

出土遺物：縄文土器、土師器、須恵器、陶  
磁器、銅銭、打製石斧、石鏃等

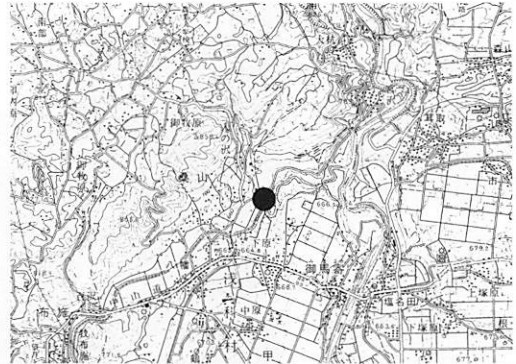
調査の概要：遺跡は千曲川の支流布施川の左  
岸、御牧ヶ原台地から北西から南東に向けて  
傾斜する丘陵の斜面上に立地している。基本  
土層は上位より現表土（I層）、褐色砂層  
（II層）、暗褐色礫混粘土質シルト層（III層・  
中世～近世）、黒褐色シルト質粘土層（IV層  
・古代か）、黒色粘土層（V層・縄文～古代）、  
砂質粘土層（IV層・基盤）で構成される。

**縄文時代**：中期後葉の土器が圧倒的に多い。またこれらの土器に伴うと思われる打製石斧が出土。中期後葉の竪穴住居跡2軒と、敷石住居が検出され、土坑もいくつか存在している。

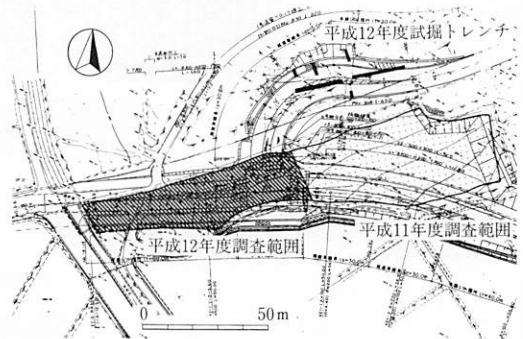
**古墳時代**：中期の土師器が一括埋納された土坑が検出されたが、住居跡などはない。

**古代**：竪穴住居跡が8軒検出されている。遺構に伴う遺物は極めて少ない。

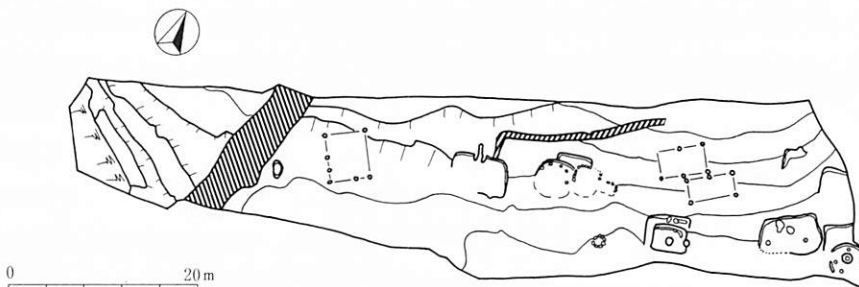
**中世**：小土坑の大半がこの時期に属すると思われる。掘立柱建物跡3棟および、連続した小坑（柵列?）、等高線に並行した溝は当該期のものと考えられる。



第8図 駒込遺跡位置図（1：100,000）



第9図 駒込遺跡調査範囲（1：3,000）



第10図 平成12年度駒込遺跡遺構配置図（1：800）

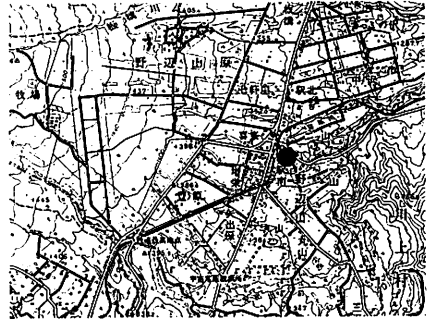
## 6 矢出川遺跡（畑地帯総合整備事業関連）

所在地：南佐久郡南牧村野辺山字二ツ石306ほか  
調査担当者：川崎 保、上田 真、百瀬長秀  
調査期間：平成11年4月19日、26日～29日（試掘）、  
10月28日、11月1日、12日（工事立会）  
調査面積：63㎡（のべ21地点）  
遺跡の立地：千曲川の支流、西川左岸の八ヶ岳山麓野  
辺山高原の東南端

出土遺物：剥片、チップ

調査の概要：本年度は承諾の得られた地点  
21か所の試掘調査と工事立ち会いを行った。  
過去に明治大学などによって行われた調査  
で見られたような、ソフトローム層上面の  
漸移層から出土した細石刃や石核は今回の  
調査では見られなかったが、第19トレンチ  
のローム層中から連続した微細な剥離があ  
る黒色で緻密な石材の剥片とチップが出土  
した。この石材は矢出川遺跡をはじめとす  
る野辺山地区の基盤とする粗粒の多孔質安  
山岩とは異なる。

工事立ち会いでは遺構・遺物とも認めら  
れなかった。



第11図 矢出川遺跡位置図（1：100,000）

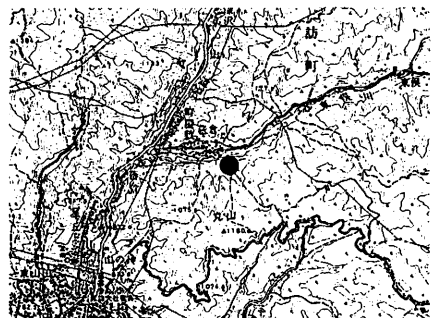


第12図 矢出川遺跡調査範囲（1：20,000）

## 7 ヤセヲ遺跡（下諏訪ダム関連事業）

所在地：諏訪郡下諏訪町萩倉1539ほか  
調査担当者：川崎 保、上田 真  
調査面積：72㎡  
調査期間：平成11年12月13日～14日  
遺跡の立地：砥川左岸の最下位段丘上  
出土遺物・遺構：なし

調査の概要：本年度は承諾の得られたヤセヲ遺跡に4  
本の試掘トレンチを設定し、試掘調査を行った。遺構  
は検出されなかった上に遺物も含まれていない。よっ  
て面的な発掘調査は必要ないものと考えられる。



第13図 ヤセヲ遺跡位置図（1：100,000）

## 8 山の神遺跡（アルプスあずみの公園関連）

所在地：大町市常盤字山の神7992ほか

調査担当者：川崎 保、上田 真

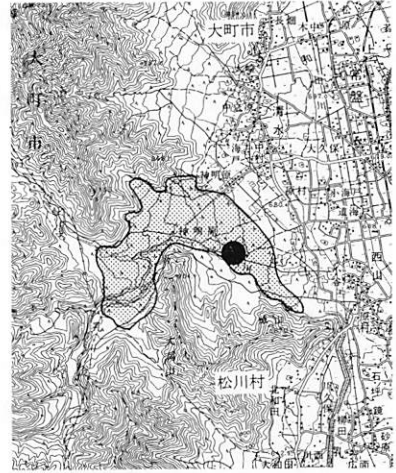
調査期間：平成11年8月9日～11月30日

調査面積：のべ4,000m<sup>2</sup>

遺跡の立地：高瀬川支流の乳川扇状地扇央部

検出遺構：縄文時代早期 竪穴住居跡11（0）、土坑  
121（73）、集石・配石遺構66（22）（方形  
区画石列含）焼土集中25（7）、溝・流路  
3（3）（ ）内は平成11年度調査分

出土遺物：縄文土器（押型文、貝殻条痕文、縄文施文  
など）、石器（石鏃、スクレイパー、石錐、  
特殊磨石など）



第14図

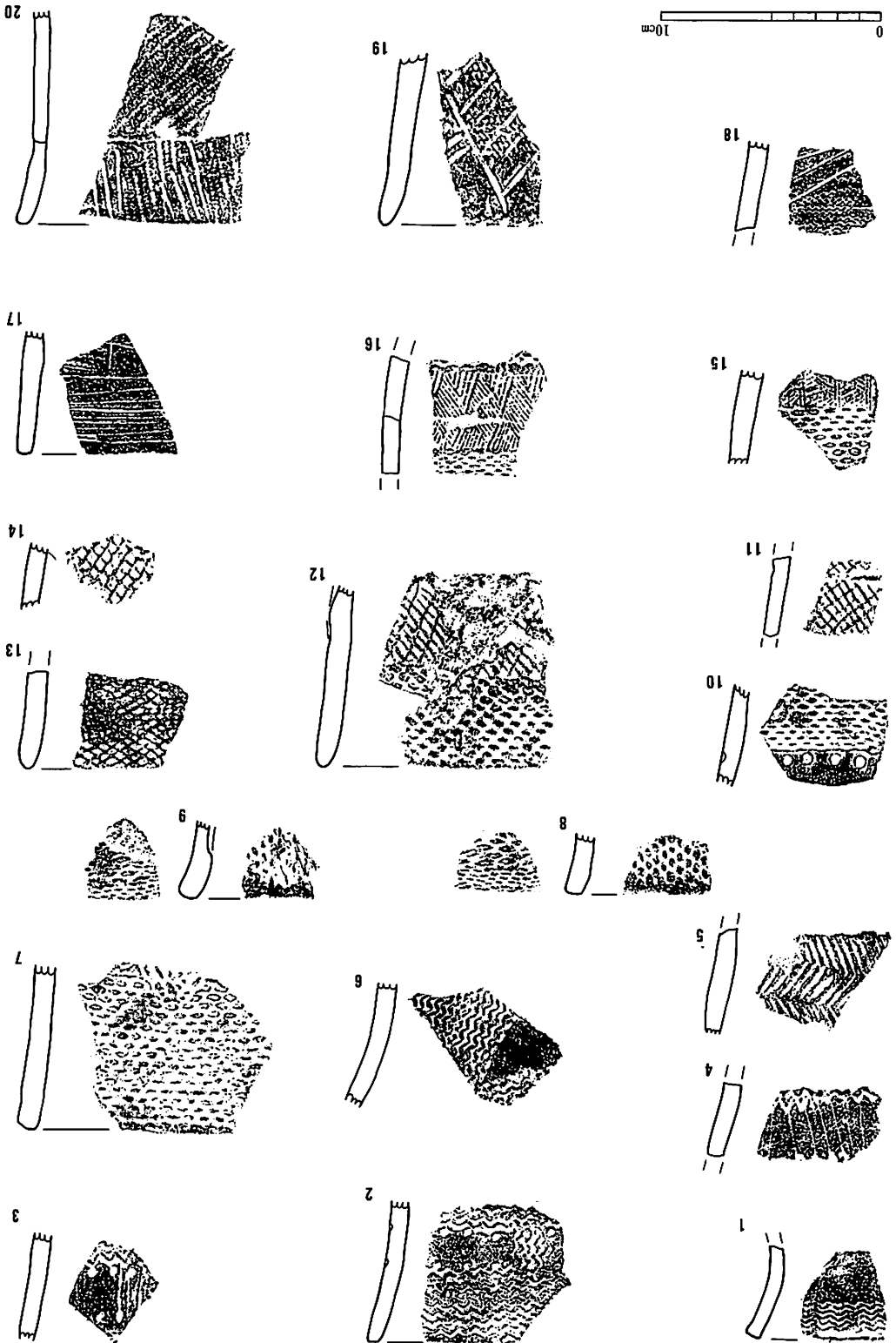
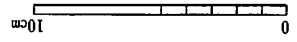
調査の概要：本年度は昨年度調査で、一旦終了しシートで保護された部分（970m<sup>2</sup> 2面）からまず調査を開始し、さらに調査区を南西側に拡張した（2,060m<sup>2</sup>）。縄文時代早期中葉から後葉の押型文土器やそれに伴う石器が出土、遺構も大半が当該期のものである。

また、昨年度から部分的には検出されていたSH28は、本年度の調査で南北8m、東西10mで、各辺がおおよそ東・北・南の向きにそった「コ」字状を呈するものであることが判明した。とくに東辺や北辺の一部では石を上下に石垣状に組んでいる。こうした石の構築物は熊本県瀬田裏遺跡（縄文時代早期後葉）が存在するが、山の神遺跡例はほぼ同時期か若干先行する時期の所産と考えられ、国内最古級の石列と判明した。昨年度までに38点出土した異形部分磨製石器（トロトロ石器）がこの石列の南側から集中して出土し、瀬田裏遺跡でも20点出土していることを考えると異形部分磨製石器と方形区画石列との関連性を考慮に入れたうえでこれらの石器の性格を検討せねばならないだろう。

土器の様相は、黒鉛を含んだ帯状施文の山形押型文土器（沢式）（図15-1）が散見されるが、遺構に伴うものではない。黒鉛を含まない山形押型文（図15-2～6）は沢式が原体幅が2cm内外であるのに対し、3～4cmと大きく、頸部の無文部に縦走沈線を充填するもの（図15-3・4）や刺突文を伴うもの（図15-10）も見られる。また楕円押型文も密接施文で原体幅は4cm内外と長い。また内面に横走1段、外面は縦位施文するものもある（図15-8・9）。異種原体を併用する例としては格子目押型文と楕円押型文（図15-12）、複合鋸歯押型文と楕円押型文（図15-15・16）がある。これらはおおよそ「細久保式」の新しい段階のものと考えられる。厳密な共伴関係は未検討だが、貝殻沈線文土器（図15-17～19）が出土していて、これら押型文土器の土器編年上の位置を考える上で示唆する点は少なくない。

縄文時代早期以降の遺構・遺物は極めて少ない。また、長辺1m弱の方形の人骨が埋葬された土壙が検出され、共伴した寛永通宝をはじめとする銅銭やキセルから近世の遺構と考えられる。

第15図 山の神遺跡出土縄文土器 (1 : 3)





## 9 長峯遺跡（県営圃場整備事業関連）

所在地：茅野市北山7964-1ほか

調査担当者：柳澤亮・白居直之

調査期間：平成11年4月1日～12月28日

西香子

調査面積：21,240（表面積20,650）㎡

遺跡の立地：八ヶ岳の裾野。角名川に沿う東西に長い細尾根上の台地上部と、その南側の沢に面する斜面部。標高1,054～1,073m。同じ台地の下方（西側）に聖石遺跡が隣接。

遺跡の特徴：縄文時代中期～後期の集落

検出遺構（平成12年2月現在）

遺構名	数	備考
竪穴住居跡	84	中期初頭～中葉49 後葉32、後期3
掘立柱建物跡 （方形柱穴列）	7	中期中葉…5棟 後期…2棟
土坑	910	貯蔵穴、墓壙、落とし穴、 馬の墓（近代？）他
焼土跡	9	削平された住居の炉か
埋設土器	2	屋外埋設土器

出土遺物

土器：縄文時代中期・後期土器

石器：石鏃、石錐、石匙、打製石斧、磨製石斧、磨石、敲き石、石皿、台石

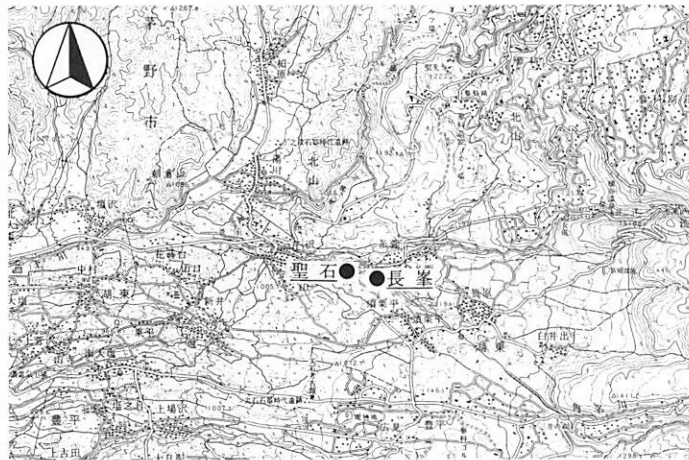
土製品：土偶1、耳飾1、土製円盤

石製品：翡翠製垂飾1、滑石製垂飾2、石棒

その他：黒曜石原石（住居跡一括出土）

**調査の経過** 長峯遺跡は古くより縄文時代の遺物が多量に散布していることで有名であった。昭和30年代の開田工事では遺構や遺物が見つかったものの、本調査は行われていない。なおこの時宮坂英式氏によって紹介された遺物は縄文時代中期全般に及び、とりわけ樽形の有孔鏢付土器（茅野市尖石考古館陳列品）や阿玉台式の深鉢形土器が著名である。

今回の圃場整備事業にかかる調査では、平成10年度に茅野市により試掘調査が実施され、遺跡の面積は台地全体35,000㎡に及ぶことが明らかになった。そのうち切土工事にかかる32,000㎡において本調査が必要とされた。また期間は平成11・12年の2ヶ年と計画した。

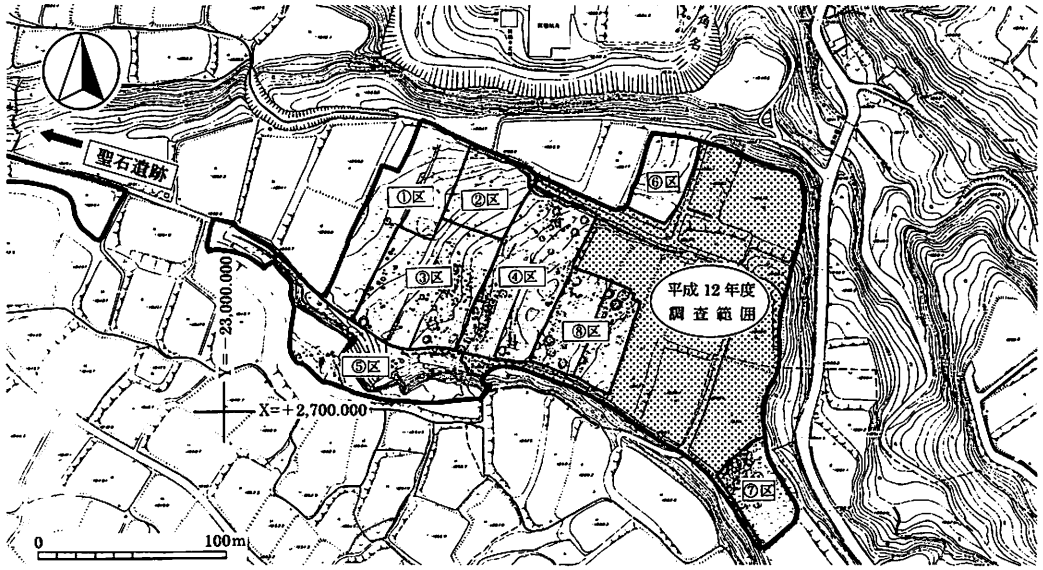


第16図 長峯遺跡位置図（1：100,000）



第17図 SX03土器出土状況





第18図 調査範囲図 (1 : 4,000)

平成11年度は、約21,000m<sup>2</sup>について、調査が実施され、その全域で縄文時代中・後期の集落が見つかっている。以下に今年度の調査概況を時期毎に記す。

**縄文時代中期初頭～中葉** 台地の横幅が最も広がる範囲 (①～⑤、⑧区) に中期初頭 (梨久保式) ～中期中葉 (藤内式) の集落が継続的に形成されている。(第19図)

中期初頭の住居は、台地の縁辺部付近に散漫に分布している。住居の形態は、略円形で立ち上がり不明瞭なタイプが多く、床面中央には土器埋設炉を設けている。

中期中葉の猪沢式期になると、円形で比較的大形の住居が主体的になる。掘方もローム層まで深く掘り込まれている。炉は土器埋設炉である。次の新道式期には、大形の楕円形を呈し、周溝と、柱穴間を結ぶ間仕切状の直線的な溝がある住居が作られる。炉は土器埋設炉のほか、小形の石囲炉も若干認められる。また住居内に貯蔵穴が設けられることが多い。なおこの時期のSB14住居では入り口部に埋甕が残されていた。新道式期～藤内式期では、壁の深さが1 mを超えるような、大規模な住居も見られる。炉も次第に石囲炉が主体となっていくようである。

これらの住居は、中期初頭の分布範囲より内側に偏りつつ、全体的に環状の分布を見る。更にその内側には土坑が密に分布している。土坑は径1 m程で、フラスコ状や鍋底状の形状のものが多く、それらは貯蔵穴と考えられる。また掘り方がやや不明瞭で、内部から滑石製垂飾や一括土器が出土する土坑は墓塚の可能性もある。

このほか、集落の中央には掘立柱建物跡が5棟並ぶ。1×2間の2棟は南北方向に軸を持ち、東西に並列している。1×1間の3棟はほぼ同位置に重複している。

出土土器には、在地の土器群のほかに、県東部から群馬県西部に集中して出土する焼町土器、北関東に中心的に分布する阿玉台式土器、北陸地方所産といえそうな土器なども見られる。

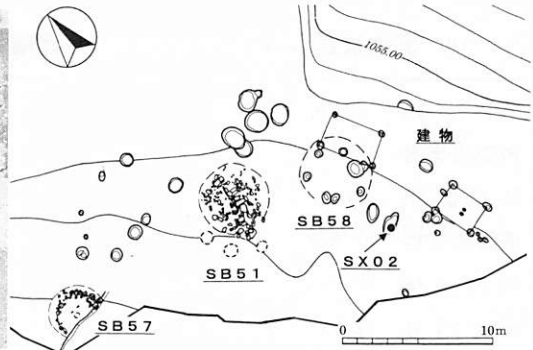
**縄文時代中期後葉** 遺跡東端、台地基部の⑦区に住居跡が重複している。約1,000m<sup>2</sup>の範囲に32軒が検出されている。(第20図) この部分では住居跡以外の遺構が非常に少ないことが特徴



第19図 縄文時代中期初頭～中葉の集落①～⑤、⑧区 (1:800)



第20図 中期後葉の集落—⑦区—(上が北)



第21図 後期前半の集落—⑤区斜面部—(1:500)

である。12年度調査範囲にこの集落の主体部があると予想される。また聖石遺跡から長峯遺跡につながる細尾根部南側には、中期後葉～後期前半の大形貯蔵穴の群列があり、興味深い。

**縄文時代後期前半** この時期になると、台地上から標高にして5m下りた、⑤区の南斜面部に敷石住居跡を中心とした集落が形成される。敷石住居跡は、石囲炉と敷石が残るSB51、周礫を残すSB57、削平により柱穴のみ残るSB58がある。貯蔵穴は径1mを超える大形のフラスコ形で、住居跡に隣接する。伏甕を伴う土壙墓(SX02)や1×1間の建物跡2棟も非常に近接した位置に分布し、集落自体が小範囲にまとまる。(第21図)

**聖石との関係** ひとつの台地に並ぶ遺跡として、聖石・長峯遺跡を見ると、まず縄文時代中期初頭に長峯遺跡の台地中央に集落が形成される。ここでは中葉の前半まで継続して集落が営まれる。その後中期後葉になると、台地東端(長峯⑦区周辺)と台地西(聖石遺跡台地上)に大規模な集落が併存する。またこの2つの集落を結ぶように細尾根上部に貯蔵穴が群列状に分布している。続く後期は集落の中心を南斜面部に移し、両遺跡のこの時期の集落は、距離にして200mほど離れた位置で、対面するように立地している。(第22図)

**今後の調査** 12年4月より再開される調査では、範囲内に後期の配石遺構、中期中葉・後葉の遺構が過密に重複することが予想される。この調査で台地全体の縄文時代各期の集落分布が明らかになる。なお芹ヶ沢地区の圃場整備関連の調査は平成12年度にて終了する。



第22図 聖石・長峯遺跡の各期の集落分析(1:5,500)

## 10 箕輪遺跡（国道153号伊那市～箕輪町・伊那バイパス関連）試掘調査

所在地：上伊那郡箕輪町三日町

調査担当者：市川隆之・若林卓・伊藤友久

試掘面積：900㎡

遺跡の立地：沖積地

検出遺構：水田跡、竪穴住居跡、土坑

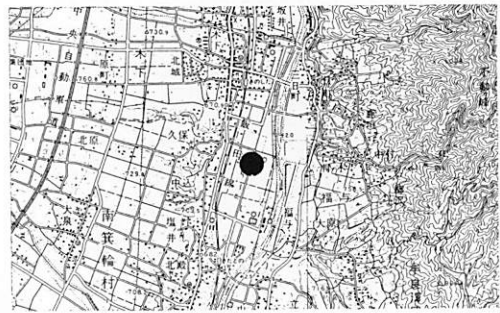
出土遺物：弥生後期土器、杭

期間：平成11年12月6日～同10日

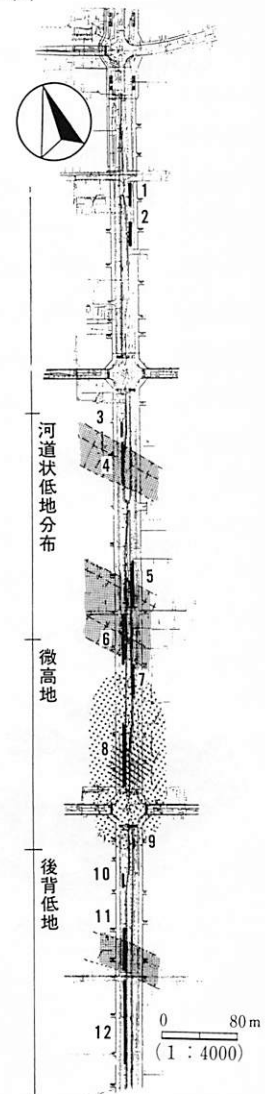
本遺跡は箕輪町南部の天竜川左岸の沖積地に立地し、多量の木製品を出土した水田遺跡として知られている。本年度、伊南バイパス建設に先立つ試掘調査を実施することになり、買収地について12本のトレンチを設定した。その結果、対象地内はいくつかの微細地形に区分され、多様な遺構が分布することが確認された。

北端の1～3トレンチは扇状地端付近に位置する比較的傾斜する地形で、現耕作土下は青灰色砂質土・砂礫層となる。ここでは明瞭な遺構の検出はなかった。4～6トレンチは1～3トレンチ同様の土層であるが、幅数十mの旧河道状低地が数箇所あり、泥炭質土層が覆う水田跡が確認された。この水田跡より杭や畦芯材の板材などの木製品は採取されたが、時期を決定できる土器は採取されなかった。7～9トレンチは微高地で現耕作土下は青灰色砂質土・砂礫層となる。土器・石器の出土も多く、8トレンチでは弥生後期と思われる竪穴住居跡、土坑を確認した。10～12トレンチは比較的傾斜が緩やかな後背低地状の地形で耕作土下は薄い泥炭質土層、その下に水田耕作土と思われる灰色粘土層、さらに青灰色砂質土層・砂礫層となる。部分的に旧河道状低地が検出されたが、いずれも青灰色砂質土や砂で埋没しており、4～6トレンチのものより古い所産と推測される。泥炭質土層とその下の灰色粘土層境周辺で杭、遺跡などを検出したが、水田面自体の遺存状態は不良で遺構の分布も散漫である。

なお、今回の試掘では狭い旧河道状低地の把握は十分とはいえ、今後、未買収地についても試掘調査が必要である。



第23図



第24図

## 11 川路大明神原遺跡（一般国道474号飯喬道路・三遠南信自動車道関連）

所在地：飯田市川路大明神原

調査担当者：市川隆之 若林卓

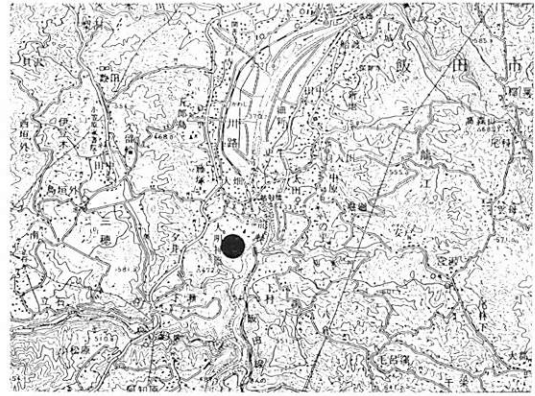
調査面積：22,500㎡

遺跡の立地：河岸段丘

検出遺構：竪穴住居跡3軒 土坑約160基

出土遺物：縄文土器・土偶・石器

調査期間：平成11年5月17日～同11月19日



第25図 川路大明神原遺跡の位置（1：100,000）

本遺跡は飯田市南部の天竜川に面した河岸段丘に立地する。古くから縄文時代の集

落遺跡として知られていたが、三遠南信自動車道建設に伴って本年より発掘調査を実施することとなった。調査対象地は本線・サービスエリア・インター予定地の広大な範囲であるが、本年度は遺跡南東部を中心に試掘調査と部分的な面的調査を実施し、併せて西側の谷部分のトレンチ調査を行った。

遺跡内の地形は中央の南北方向の谷状低地を挟んで東西で異なる。西部は沢状低地と低い尾根状の高まりから構成される西方山地から延びる緩傾斜地となり、東部は北・南の段丘縁へ向かって緩やかに傾斜する低丘陵状の地形である。本年の調査では東部段丘頂部から西縁と段丘南縁に遺構が分布することが知られた。

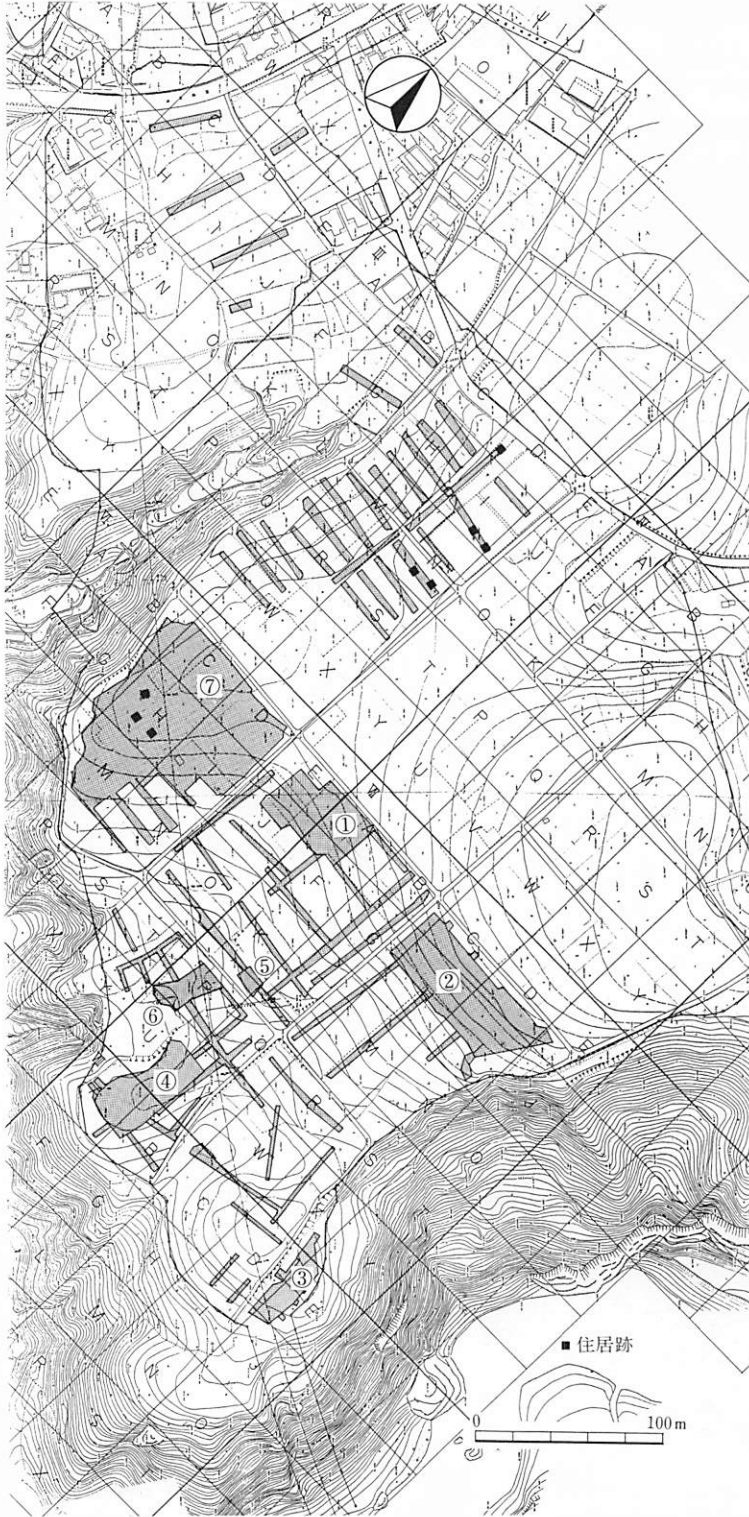
検出遺構は竪穴住居跡・小竪穴、土坑、集石炉、掘立柱建物跡、溝跡などがある。大部分が縄文時代の所産と思われる、掘立柱建物跡と溝跡は時期不明ながら近世以後の可能性もある。

竪穴住居跡はすべて縄文時代中期前半の所産で、⑦区中央に近接して3軒検出された。平面形は隅丸長方形と楕円形があり、中央に埋甕炉とその周囲に4～5基の柱穴跡が配置される。



第26図 ⑦区調査状況

壁は斜めに掘り込まれて床面との境も不明瞭で、床面は凹凸が著しくやや軟弱である。出土遺物ではSB2から僅かな土器しか得られなかったが、SB1からは東海系の土器・船元式・貉沢系の土器、SB3よりは平出3A式がまとまって出土した。竪穴住居跡の分布は試掘結果と合わせると東部段丘の西縁に帯状に分布するとみられる。なお、⑦区北方のトレンチで検出された住居跡では石組炉と思われる石が確認



第27図 調査範囲

でき、時期的に若干下るものが含まれるようだ。

小竪穴は直径3 m前後の円形に浅く掘り込まれたもので、形状は竪穴住居跡に類似するが、炉はなく柱穴跡も判然としない。性格不明ながら段丘頂部付近の⑦・①・②区で1基ずつ検出され、⑦区の小竪穴からSB2と同類の土器が出土した。

土坑には陥し穴、円形土坑、小型の深鉢や鉢類の大型破片を出土の小土坑がある。陥し穴は①・②・⑦区の段丘頂部から傾斜際で検出され、平面形は円形、楕円形、長方形で底面に小ピットがあるものもないものがある。段丘頂部から傾斜地にかかる部分に分布し、一部集落域と重なる。出土遺物はほとんどないが、⑦区では円形土坑に切られるものがある。円形土坑は直径1~2 m前後で、壁はほぼ垂直、底面は平坦である。形状から貯蔵穴の可能性はある。埋土中からの土器破片や石器の出

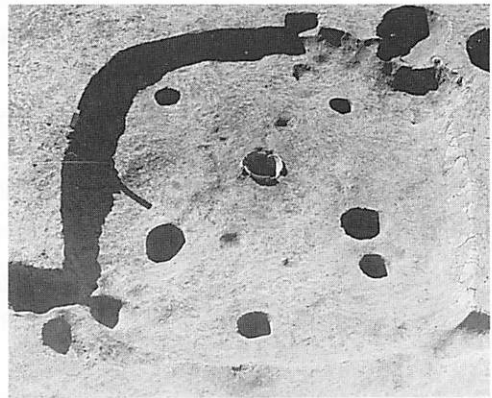


土も多く、人頭大の礫を出土したものが複数ある。この土坑は⑦区を中心に分布し、単独や2～3基が近接するものが、さらに大きな群を構成するようにみえる。時期の詳細は検討できていないが、出土土器と分布状況から竪穴住居跡とほぼ近似時期のものと思われる。鉢・小型深鉢の大型破片を出土した小土坑は⑦区のみで散在的に検出された。性格は明らかにできなかったが、分布から集落域内の施設とみられる。集石炉は段丘南縁の③・④区で散在的に検出された。内部に焼礫多数が検出されたが、出土遺物は非常にわずかである。③・④区では集石炉に関連すると思われる1～2基の土坑が近接して検出され、④区では黒耀石チップを出土したものと焼土を伴うものが検出された。

上記の遺構分布から、本遺跡では東部段丘の西縁が竪穴住居跡、円形土坑、小型深鉢・鉢類出土の小土坑から構成される集落域、段丘頂部から傾斜面際は陥し穴による狩猟の場、段丘縁に集石炉と土坑若干で構成されるキャンプ地的な利用があったとみられる。小竪穴の帰属は判断に迷うが、1基ずつ離れて検出されたことから集落域に関連するものだろうか。このように本遺跡は多様な活動が場所を違えながら重複するとみられるが、これらの活動の時間差については明らかにしていない。

出土遺物は未整理であるが、土器には東海系や貉沢式、船元式があり、当該期の下伊那の土器様相を知る好資料と思われる。石器は従来指摘される下伊那地域の様相に一致し、石斧・横刃型石器・石錘が多く、石皿・石鏃・石匙などの小型石器は非常に少ない特長をもつ。これ以外では土偶破片若干が採取されている。

本年度の調査は部分的ながら、飯田市周辺で類例が少ない縄文中期前半の集落、落とし穴を確認することができた。来年度以後の調査で遺跡内容はよりあきらかにされると期待される。



第28図 住居跡 (SB 3)



第29図 円形土坑



第30図 陥し穴

---

## 12 更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡（上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告24、27、28 整理作業）

---

担当者：寺内隆夫、鳥羽英継、水沢教子、宮島義和

これら一連の遺跡は、長野盆地南部の千曲川右岸に位置し、後背湿地（更埴条里遺跡）・自然堤防Ⅰ群（屋代遺跡群）・窪河原遺跡（旧河道と自然堤防Ⅱ群）の全長約2.3kmにおよぶ。発掘調査は平成2年度から7年度にかけて行われ、整理調査は平成7年度から11年度にわたる。

これまで、『木簡編』『弥生・古墳編』『古代Ⅰ編』の刊行を終え、今年度は、『縄文編』『古代Ⅱ・中世・近世編』『総論編』を刊行する。縄文時代に関する成果の一部については、昨年度の『年報15』に掲載してあるので、ここでは、9世紀第4四半期の洪水以後の復興と開発について『古代Ⅱ・中世・近世編』と『総論編』の成果を取り上げることとする。

**9世紀第4四半期の洪水について** 更埴条里遺跡、屋代遺跡群のほぼ全域がⅢ層とした洪水砂によって被覆されている。下層の竪穴住居から出土した灰釉陶器では光ヶ丘1号窯式が主体となっており、上層から切り込む竪穴住居では大原2号窯式が光ヶ丘1号窯式を凌駕することから、Ⅲ層堆積の年代は、9世紀第4四半期頃と考えられる。これは、『類従三代格』に記載されていた仁和四（888）年に信濃国の六郡を襲った洪水に近似した年代である。

今回の調査区内での堆積量は、千曲川の旧河道内水田地帯で1.6m、自然堤防Ⅰ群～後背湿地Ⅰ群間で10～50cmが堆積していた。また、後世の開発によってⅢ層がカクランされている集落域でも竪穴住居の凹地全体に砂の堆積が確認されている。被害状況を見ると、旧河道内（屋代遺跡群⑥区）では大きく3段階の変遷が認められた。まず、1m以上の砂層を堆積させたのち、その砂層を削り込むように流路が形成され、最終的にはそれらの流路をも埋め尽くす砂層の堆積が認められた。自然堤防を越えた段階は明確ではないが、堤防を越えた主な地点は、調査区の東方、馬口遺跡の北側と見られる（第31図）。ここから南東側の標高の低い地区へ向かって広がっていったと見られる。調査区内の局所的な状況を見ると、上記の洪水の本流とは別に、北側の旧河道から水路を逆流して集落内を襲うルートが存在したようである。屋代遺跡群②区では、水路下流部から押し寄せた土砂の堆積が分岐点に認められた。後背湿地へ向かった洪水の流れは増水によって、今度は東側後背湿地側から回り込むように西側の標高の高い地域へ広がっていった。屋代遺跡群①区～更埴条里遺跡では、東から溢れた洪水が南北大畦畔（坪境）によって遮られ、畦畔西側では堆積が薄くなる。また、拳大～親指大の軽石が畦畔の東側に集中して認められ、西側へ乗り越えられなかった量が多かったことを示している。

洪水に対する住人の対処を示す例としては、屋代遺跡群⑤区で発見された水路内出土の土塊群があげられる。これらは、集落の北側（旧河道寄り）にはほぼ限定されること、土塊の大きさが比較的類似していること、砂層最下部より若干上で検出されていることから、増水に対処して水路脇に土塊（土藪？）を積み上げたものの、洪水規模がそれ以上であったために崩れ落ち、砂の堆積とともに水路内に残った痕跡と考えている。

また、洪水の季節は、牛馬による犁の耕作痕が明瞭な水田面が多く見られることから、田植



え前の時期と見ることができよう。『類従三代格』の5月8日（新暦6月20日）に近い時期であったと見られる。ここで、問題となったのは使用状態のまま洪水に埋没した竪穴建物が一軒も存在しない点であった。

9世紀第4四半期には、集落は縮小傾向にあり、低地へ進出した集落のうち、②区集落、③b区集落が消滅、他の集落も竪穴建物1～2軒に礎石か掘立柱建物1～2棟になっていた。しかし、更埴条里遺跡K地区のように、洪水を挟んだ前後の時期の建物が存在していながら、洪水時だけ集落が放棄されていたと見るのは不自然である。

そこで、考えられるのは、低地では夏季に竪穴建物を使用していなかったとする見方である。竪穴建物の床面は周囲の水田面の標高よりも低くなっているため、水田に水を入れ地下水位が上昇しはじめると浸透圧によって水没してしまうからである。そのため、洪水時に竪穴建物内に遺棄された物品がなかったものと考えた。夏季の竪穴建物の使用状況を含めて、問題提起としたい。

**洪水直後の復興** 洪水直後の復興は、比較的被害の少なかった更埴条里遺跡K地区と、それ以南の後背湿地I群側ではじまっている。弥生時代以来、集落にとって恵まれた立地条件として活用されてきた自然堤防I群高所では、集落の再建は行われていない。これは、千曲川に近く洪水被害の記憶をぬぐい去れなかった点、旧河道内の水田が1.6mもの砂で埋没してしまったこと、埋没した水路の復旧が不可能であったことなどによると考えられる。

復興集落は耕作が可能と見られる後背湿地I群の縁辺である更埴条里遺跡I地区に成立し、後背湿地I群側の条里型地割や水路の復旧を行っている。自然堤防I群側の再開発に着手したのは、10世紀後半以降である。しかし、最初に行われた水路の復旧は成功していない。10世紀末～11世紀にかけては、個別の竪穴建物が自然堤防側に点在して進出するようになる。水路や水田は不明確であり、小規模な集団単位による畠地の開発であったと見られる。

**中世の集落と開発** 自然堤防I群側で領主層による大規模な開発が行われるのは、12世紀以降である。12世紀の開発は、まず点在していた竪穴建物を移転させて、水路の再整備と畠開発を行い。集落は五十里川河岸の屋敷地？を中心とした地点に集約される。

13・14世紀以降に再度、大きな変化が現れる。五十里川河岸の集落が縮小する中、自然堤防I群高所に居館を中心とした集落が、密集する形で成立してゆくのである。この時期には、旧河道内の水田化や離水した自然堤防II群の畠開発が進展する。



第31図 Ⅲ層（洪水砂）堆積量

---

## 13 松原遺跡（上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5・6 整理作業）

---

担 当 者：上田典男 青木一男 町田勝則 贄田 明 市川桂子 西嶋洋子

### 1. 経過

本遺跡は、長野市松代町東寺尾に所在する縄文時代から中世および近世に至るまでの複合遺跡で、平成元年度から同3年度に発掘調査が実施された。整理作業は、翌平成4年度から基礎整理が、平成6年度から本格的な整理作業が開始され、現在に至っている。この間、平成9年度に縄文時代に関わる報告書が、平成10年度に弥生時代に関わる報告書の一部が刊行されている。

### 2. 本年度の整理作業

#### ①上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5 弥生・総論

弥生時代の調査結果及び松原遺跡総論について報告する本書は、発掘調査データが膨大なため、8分冊に分けて刊行することとなっている。分冊内容は以下の通りであり、これまでに第2・4・6分冊を刊行した。

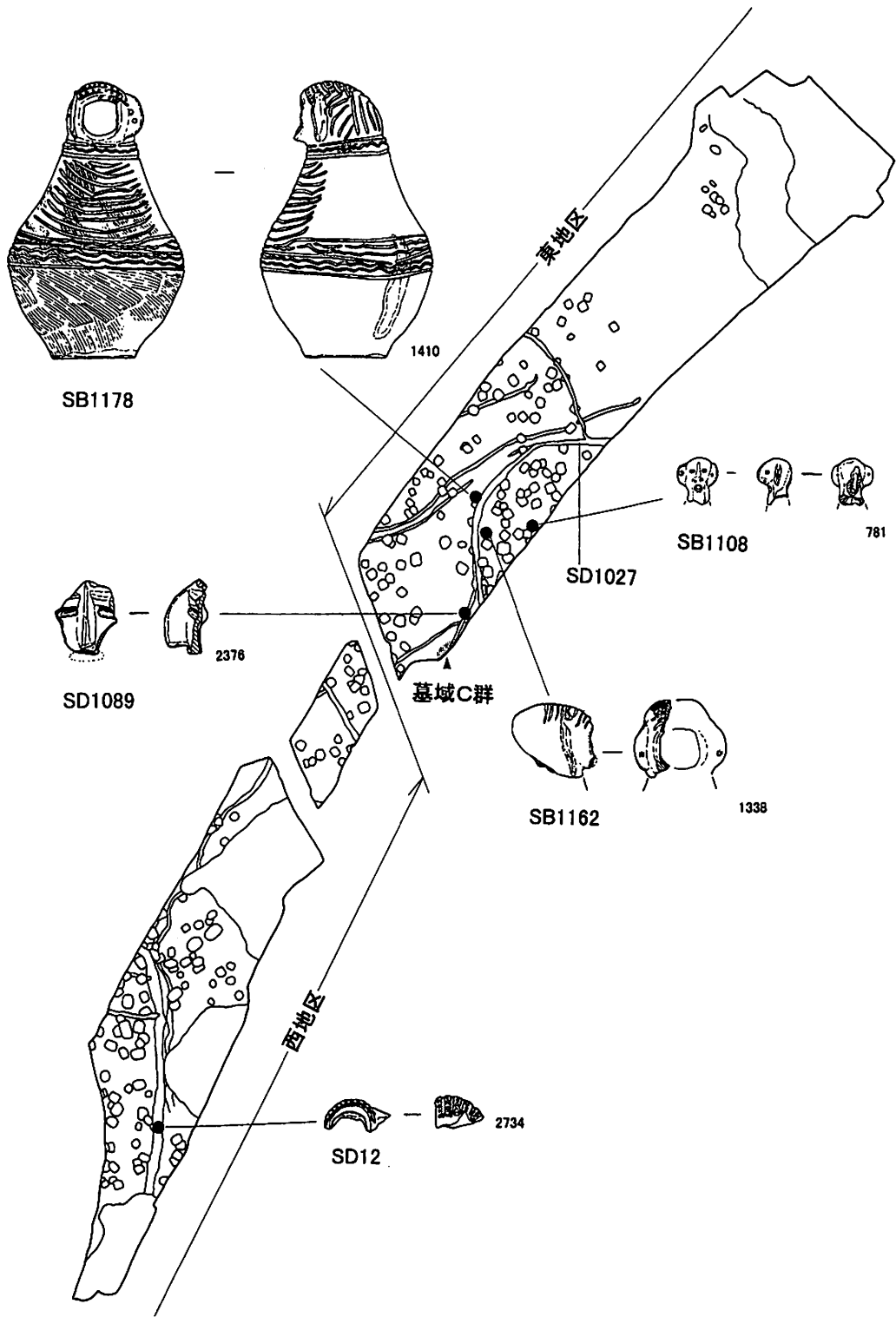
- |                      |                    |
|----------------------|--------------------|
| 第1分冊：調査概要・弥生時代中期遺構本文 | 第5分冊：弥生時代中期石器・その他  |
| 第2分冊：弥生時代中期遺構図版      | 第6分冊：弥生時代後期・古墳時代前期 |
| 第3分冊：弥生時代中期土器本文      | 第7分冊：弥生時代考察・検索     |
| 第4分冊：弥生時代中期土器図版      | 第8分冊：松原遺跡総論・科学分析   |

本年度は報告書作成業務の最終年度にあたり、第1・3・5・7・8分冊を刊行した。

「遺構本文」編では、膨大な遺構に対して、栗林式期の松原集落を今後分析していく上で必要な基礎データの提示を目的とした。「土器本文」編では、個別説明および出土状況について詳細な提示を行った。「石器・その他」編では石器類5137点、石器製作にかかわる石屑8087点について提示および分析を行った。特に、大陸系大型蛤刃石斧については敲打段階からの未製品が明らかとなり、隣接する榎田遺跡とともに栗林式様式圏の石器製作、流通拠点の実態が浮びあがってきた。各分冊で触れた内容は松原遺跡に留まらず、東日本の弥生時代研究に様々な問題を提起するものと確信する。このことについては、7、8分冊で問題提起を行った。

#### ②上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書6 古代・中世

平坦面に展開する古代・中世の集落址と山麓斜面部に立地する後期古墳群、五輪塔を伴う中世の火葬墓群、それらに伴う多種多様かつ膨大な出土遺物について、事実記載を中心に報告した。そうした中で、古墳については築造過程に視点を置き、従来「土石混合墳」と称されていた古墳との差異を明確化した。また、400軒余に上る古代の竪穴住居址から出土した土器群を基に段階設定を行い、北信地域の地域性を導き出した。その他の遺構・遺物についても、可能な限り問題提起を行った。



第32図 弥生中期遺構配置と人面土器出土状況

## 14 川田条里遺跡（上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書10・整理作業）

担 当 者：鶴田典昭、河西克造

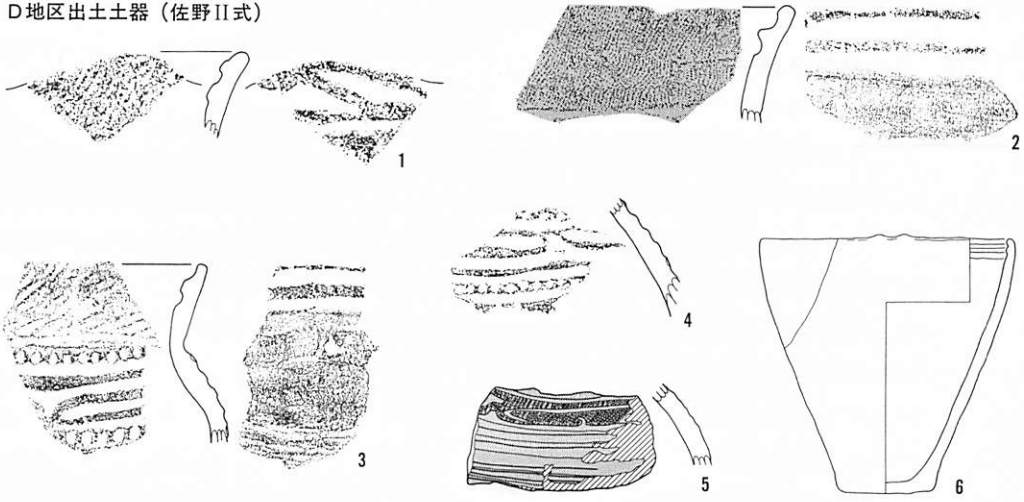
**経過と本年度の作業** 川田条里遺跡は長野市若穂川田地籍に所在し、千曲川右岸の後背湿地に立地する水田遺跡である。平成元年から二年間にわたり発掘調査が行われ、弥生時代中期から近世までの水田遺構が発見された。平成3年から木製品の整理を開始したが、整理作業は一時中断し、平成10年度より整理作業を再開した。本年度は遺物・遺構図のトレース、原稿執筆などを行い、平成12年3月に報告書を刊行する予定である。

**中間報告** 本遺跡は弥生時代中期以降の水田跡が中心となる。検出された水田跡を時期別にみると、弥生時代中期では埋没水田が部分的に確認されるのに対し、弥生時代後期では調査区全域に水田が確認される。古墳時代以降は部分的な調査であるが、プラントオパール分析の結果を考慮すると、調査区全域に水田が広がっていたと推定される。しかし、古墳時代には田面が泥炭層で被われている地区もあり、一定期間水田耕作が休止していた地区もあった。また、弥生時代から古墳時代前期にかけて頻繁な洪水による砂層の堆積があり、埋没水田が多数検出されるのに対し、古墳時代中期から古代にかけては粘土質の土が堆積し、埋没水田はあまり検出されない。中世以降再び砂層堆積が頻繁になり埋没水田が検出されるようになる傾向がある。

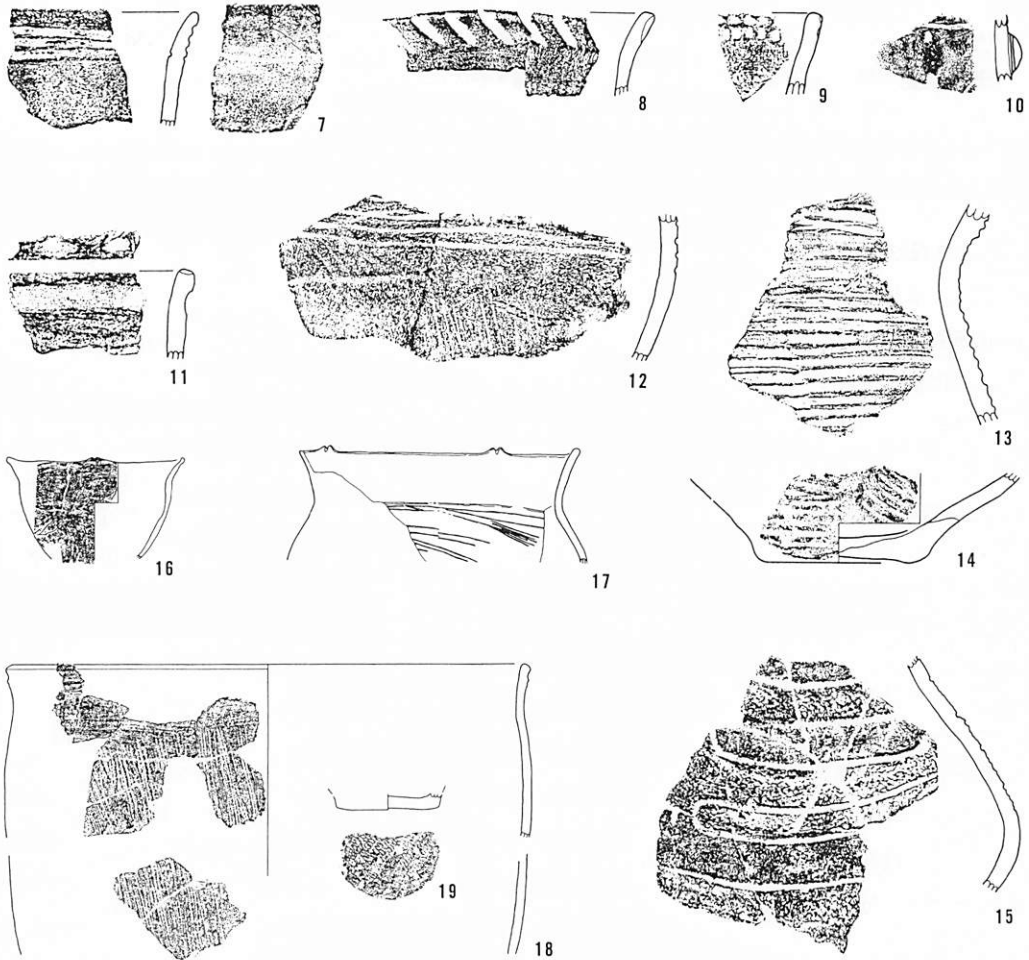
今回はA地区とD地区で弥生時代の水田遺構の下層から出土した縄文時代晩期の遺物について紹介する。縄文晩期の遺物包含層からはプラントオパールがほとんど検出されず、少なくとも調査区内では稲作の痕跡は認められない。A地区では氷II式、D地区では佐野II式が中心となるが、両地区は約200m離れており、包含層の層位的上下関係はつかめない。A地区では直径約20mの範囲に土器石器が集中しており、2カ所の焼土跡が検出された。石器では打製石斧、石鏃などが出土した。土器は氷II式の甕形土器の他に、東海系の条痕文土器（13・14）、縄文に類似した回転原体による文様の壺形土器（15）、口縁に刺突列が巡る系統が不明な土器（8・9）などである。これらの土器群は一括資料であり、同時期の様相を示したものである。D地区の詳細は不明であるが、A地区同様にまとまって出土したものである。土器の他に石鏃6点、石錐2点、剥片114点などが出土した。包含層の上には泥炭層が堆積しており、その上に弥生時代の水田層がある。また、縄文晩期包含層の珪藻・植物珪酸体分析の結果、沼沢から湿地のような水域であったと推定されており、水辺に残されたキャンプサイトの遺跡であったと考えられよう。

本遺跡の南東約500mには縄文晩期の集落である宮崎遺跡がある。川田条里遺跡に残された遺物は、宮崎遺跡との関係が予想され、川田地区における稲作開始期前後の様子を知るための貴重な資料である。善光寺平では縄文晩期の稲作は検証されていないが、弥生時代には水田域となった区域に縄文晩期の生活の痕跡が認められ、宮崎遺跡ではほとんど出土例が無い打製石斧が氷II式に伴って出土しており、水田開拓の幕開けを予想させる。従来善光寺平周辺では縄文晩期に打製石斧はあまり知られておらず、近隣の更埴条里遺跡でも晩期前半から中頃の打製石斧が多数出土しており、縄文時代晩期の稲作を検証する上で面白い資料である。

D地区出土土器（佐野II式）



A地区出土土器（水II式）



第33図 川田条里遺跡出土縄文晩期土器（6、16～19は1/6他は1/3）

---

15 日向林B遺跡・貫ノ木遺跡ほか（上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15  
・16 整理作業）

---

担 当 者：大竹憲昭 谷 和隆 中島英子

1. 経過と本年度の作業 上信越自動車道は上水内郡信濃町野尻湖の南西部の丘陵地帯を通過した。用地内に11ヶ所の周知の遺跡があり、平成5年度から平成7年度まで、3年間の発掘調査がおこなわれ、旧石器時代の資料を中心に多数の遺構・遺物が検出された。平成8年度より報告書刊行に向けた通年の整理作業体制に入った。4年目の本年度が最終年にあたり、図版類の作成と原稿執筆を中心とした整理作業となった。

報告書は、遺跡の位置と規模・時代を考慮して以下の構成をとり、平成12年3月末刊行予定である。なお、付編は、今回の調査の遺構・遺物の全データをCD-ROMに納めた。

〔上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15 信濃町内その1〕

旧石器Ⅰ セツ栗遺跡・日向林B遺跡・大平B遺跡 本文編・図版編 2分冊

旧石器Ⅱ 裏ノ山遺跡・東裏遺跡・大久保南遺跡・上ノ原遺跡 本文編・図版編 2分冊

旧石器Ⅲ 貫ノ木遺跡・西岡A遺跡 本文編・図版編・写真図版編 3分冊

〔上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書16 信濃町内その2〕

縄文～近世 星光山荘B遺跡・貫ノ木遺跡・日向林B遺跡他 本文編・図版編 2分冊

付 編 遺構・遺物データ編

2. 本年度の成果 調査の全体的な成果については、報告書の各分冊をご覧いただきたい。ここでは、本年度結果がまとまった黒曜石産地同定分析について、その概要を示すことにする。野尻湖遺跡群では、旧石器時代の遺物が約65,000点出土した。用いられた石材の構成をみると無斑晶質安山岩が最も多いが、次いで黒曜石が用いられており、各遺跡、各時期にみられる。その黒曜石の蛍光X線分析を行い、産地を同定することにより、当時の石材流通のあり方を通して、集落構造・地域社会構造等の復元を目標とした。分析は、沼津工業高等専門学校の望月明彦助教授に委託し、その結果を第1表に示した。分析した黒曜石は碎片で分析不可能なものを除き、12,000点以上におよぶ。その分析・検討には3年余を費やした。以下に分析の成果の一端を示す。

**全点分析の成果：**旧石器時代の遺跡にはたくさんの石器や、石器製作時の石屑が残されているが、これを材質や石器の種類ごとにわけて分析することによって、遺跡の構造を理解している。しかし、黒曜石は個体差が少ないために肉眼による判別は困難であったため、詳細な検討がなかなかできない状況にあった。しかし今回の全点分析により、それまでわからなかった差をみることができるようになり、遺跡内の集団や時間差を考えるうえでの貴重な材料を提供してくれた。この遺跡全点分析の試みは近年になって行なわれるようになったが、今回は、近接する複数の遺跡で分析を行なうことができたため、その成果は遺跡内構造研究にとどまらず、遺跡間構造へ言及できるまでになった。これは全国でもはじめての試みであるため、今後の研究の起点となると位置付けられよう。

遠隔地の石材が持ち込まれている点について：第2表に遠隔地からもたらされた資料を示した。これまでに旧石器時代で黒曜石が遠くへ運ばれている例としては、富山県立美遺跡で青森県深浦産が、奈良県二上山遺跡群と和田峠産という分析結果があった。今回のように同じ地域の複数時期・複数遺跡から遠隔地の結果がでた例ははじめてであろう。このことは、後期旧石器時代において青森・秋田産や神津島産の黒曜石が持ち込まれることが単発的で特別な現象ではなかったことを示しているといえよう。旧石器時代人たちは狩猟をしながら一定地域内を移動して生活していたと考えられている。しかし、青森-野尻湖、神津島-野尻湖の距離はそれまでに考えられてきた旧石器時代人たちの移動範囲を上回る距離である。より良質な黒曜石がもっと近くで採れるにもかかわらず、500キロも離れた場所から黒曜石が持ち込まれているのは驚きである。石器を見る限りでは、青森・秋田・神津島の黒曜石よりも長野県産の黒曜石が質や採集量が劣るとは考えられないため、これらの黒曜石が入ってくる強い社会的要因が野尻湖にあったと考えられる。

遺跡名	貫ノ木	日向林B	東裏	上ノ原	大久保南	西岡A	裏ノ山	七ツ栗	大平B	日向林A	合計	
分析数	4894	3540	1062	332	516	486	1678	38	43	53	12642	
和田(WO)エリア	ぶどう沢群	5	0	8	1	0	1	0	0	0	15	
	高松沢群	23	0	12	1	0	1	0	0	0	37	
和田(WD)エリア	鷹山群	1884	2866	683	127	455	257	1489	31	36	43	7871
	小深沢群	384	487	18	0	4	15	65	0	1	0	974
	土屋橋北群	114	35	26	1	0	1	14	0	0	0	191
	土屋橋西群	188	0	42	1	4	8	22	2	0	3	270
	土屋橋南群	116	0	10	0	1	3	2	1	0	1	134
諏訪エリア	星ヶ台群	1754	34	175	8	27	117	45	1	2	0	2163
蓼科エリア	冷山群	171	72	10	172	1	51	1	0	1	0	479
	双子山群	3	1	0	1	0	1	0	0	0	0	6
神津島エリア	恩馳島群	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	
高原山エリア	甘湯沢群	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	
男鹿エリア	金ヶ崎群	0	0	2	1	0	0	0	0	0	4	
深浦エリア	八森山群	1	0	0	0	1	0	0	0	0	3	
木造エリア	出来島群	0	0	0	0	0	0	0	3	0	3	
不可など	251	45	76	18	23	30	39	3	0	1	486	

第1表 黒曜石蛍光X線産地分析結果

ID	遺跡名	石器	時期	産地名	産地所在地	直線距離
1	日向林A	貝殻状刃器	後期旧石器前半	男鹿金ヶ崎	秋田県男鹿市	370*
2	日向林A	貝殻状刃器	後期旧石器前半	男鹿金ヶ崎	秋田県男鹿市	370*
3	日向林A	貝殻状刃器	後期旧石器前半	男鹿金ヶ崎	秋田県男鹿市	370*
4	日向林A	貝殻状刃器	後期旧石器前半	深浦八森山	青森県深浦町	440*
5	日向林A	使用剥片	後期旧石器前半	男鹿金ヶ崎	秋田県男鹿市	370*
6	大平B	石核	後期旧石器～縄文早期	木造出来島	青森県木造町	460*
7	大平B	石核	後期旧石器～縄文早期	木造出来島	青森県木造町	460*
8	大平B	石核	後期旧石器～縄文早期	木造出来島	青森県木造町	460*
9	東裏	削器	後期旧石器後半	男鹿金ヶ崎	秋田県男鹿市	370*
10	大久保南	細石核	後期旧石器終末	深浦八森山	青森県深浦町	440*
11	上ノ原	剥片	後期旧石器終末	神津島恩馳島	東京都神津島村	300*
12	上ノ原	削器	後期旧石器終末	男鹿金ヶ崎	秋田県男鹿市	370*
13	上ノ原	細石核	後期旧石器終末	男鹿金ヶ崎	秋田県男鹿市	370*
14	貫ノ木	加工のある剥片	後期旧石器後半	深浦八森山	青森県深浦町	440*
15	西岡A	剥片	後期旧石器後半	高原山甘湯沢群	栃木県矢板市・塩原町	280*
16	西岡A	加工のある剥片	後期旧石器後半	高原山甘湯沢群	栃木県矢板市・塩原町	280*

第2表 長野県外産地黒曜石出土遺跡と産地までの距離

## II 普及・公開活動の概要

### 1 現地説明会

今年度の現地説明会は、発掘調査が実施された7遺跡中4遺跡で行われた。

浅科村駒込遺跡では7月25日（日）に実施し、縄文時代中期から古代にかけての遺構・遺物を公開した。地元の方々を中心に、50名以上の見学者が集まった。

大町市山の神遺跡では10月17日（日）に実施し、縄文時代早期の遺構・遺物を公開した。100名近い見学者が訪れたが、昨年来の調査成果が話題になったためか、県外からの見学者も少なくなかった。



第34図 長峰遺跡現地説明会

茅野市長峰遺跡では10月23日（土）に実施し、縄文時代中期の集落と遺物を公開した。昨年調査した聖石遺跡が著名となったためか、やはり県外からの見学者が目立った。

飯田市川路大明神原遺跡では10月31日（日）に実施し、縄文時代中期の遺構・遺物を公開した。当センターとしては下伊那地域で初めての現地説明会であったが、地元の方の関心が高く、50名以上の見学者が集まった。

どの現地説明会でも60才以上の見学者の割合が非常に高いのが目立つ。生涯学習への関心の高さが窺えるが、一方若年層へどう働きかけるかが今後の課題だろう。

### 2 展示会等

今年度は県内市町村の教育委員会の協力を得た企画展とし、開催地域も県内各地に拡大し、公的な展示機関以外にも会場を確保した。より総合的で、新たな見学者層の開拓をも目指した



初めての試みである。市町村教育委員会の協力を得て用意した以下の展示品のうちから、会場の都合などに適したものを選択した展示した。用意したのは遺物やパネルなどで、以下の遺跡の資料である。

[当センター保管資料]

信濃町：日向林B遺跡、照月台遺跡、貫ノ木遺跡、川久保遺跡、仲町遺跡、長野市：松原遺跡、篠ノ井遺跡群、榎田遺跡、更埴市：屋代遺跡群、大穴遺跡、清水製鉄遺跡、更埴条里遺跡、窪河原遺跡、大町市：山の神遺跡、茅野市：長峰遺跡、聖石遺跡、赤い土器の復元（複製）資料、整理作業風景パネル、当センターの紹介パネル

[市町村教育委員会保管資料]

中野市：高遠山古墳、長野市：檀田遺跡、南宮遺跡、篠ノ井遺跡群、更埴市：屋代遺跡群、有明山古墳、長門町：追分遺跡、大町市：大崎遺跡、松本市：エリ穴遺跡、平瀬遺跡、大桑村：大野遺跡、飯田市：溝口の塚古墳、正清寺古墳、恒川遺跡群、辻前遺跡

飯田市上郷考古博物館を会場とした展示会を、11月20日（土）～12月5日（日）に実施した。展示遺物は約140点、パネル約40点である。開催初日には講演会と展示説明会も実施し、飯田市上郷考古博物館学芸員の山下誠一氏と当センターの市川隆之調査研究員が講演した。開館日14日間で380人以上の入館者があった。

更埴市民ギャラリーを会場とした展示会を、12月11日（土）～12月26日（日）に実施した。展示パネルは約70点である。会場はしなの鉄道屋代駅舎内にあり、時間待ちの方たちに気軽に見てもらえるように、更埴市内の遺跡に重点を置いて、写真パネルを展示した。



第35図 飯田市上郷考古博物館講演会

長野県庁1階ロビーを会場とした展示会を、1月31日（月）～2月10日（木）に実施した。展示遺物は14点、パネル約20点などである。行政関係者や一般県民の理解向上に期待した。

平安堂新長野店3階フリースペースを会場とした展示会を、1月31日（月）～2月10日（木）に実施した。展示パネルは16点などである。長野駅前の買い物客などが多い会場で、これまでの固定的なファン以外の新たな見学者層の開拓を期待した。



第36図 県庁ロビーの展示会



第37図 平安堂の展示会

長野県民文化会館展示ホールを会場とした展示会を2月2日（水）～2月12日（土）に実施した。展示遺物は約160点、パネル約60点などである。昨年を引き続いての開催で、開館日10日間で800名以上の見学者があった。

長野県立歴史館企画展示室を会場とした展示会を3月18日（土）～5月7日（日）まで行っている。展示遺物は約300点、パネルは約80点である。

### 3 指導・研究会・学習会

期 日	講 師	指導内容ほか
11/6/7	国立歴史民俗博物館・辻誠一郎助教授	屋代遺跡群古環境の復元
11/7/19	明治大学・安蒜政雄教授	照月台遺跡旧石器時代の遺構について
11/7/21～23	北陸学院短期大学・小林正史助教授	弥生土器の使用方法について
11/11/8	国学院大学・小林達雄教授	山の神遺跡方形区画石列について
11/11/11	地質学者・松島信幸氏 ・寺平宏氏	川路大明神原遺跡の地質について
12/2/4	信州大学・河内晋平教授	土器中の岩石・鉱物について

### 4 刊行物

「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5—松原遺跡弥生・総論」第1、3、5、8分冊

「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書6—松原遺跡古代」

「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書10—川田条里遺跡」

「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書11—春山遺跡」

「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15—信濃町1旧石器」

「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書16—信濃町2縄文時代以降」

「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書19—小諸市3」

「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書24—更埴条里・屋代遺跡縄文時代」

「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書27—更埴条里・屋代遺跡古代・中世」

「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書28—更埴条里・屋代遺跡総論」

「国道403号線土口バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書」

「長野県埋蔵文化財センター年報16」

「長野県埋蔵文化財センター紀要8」

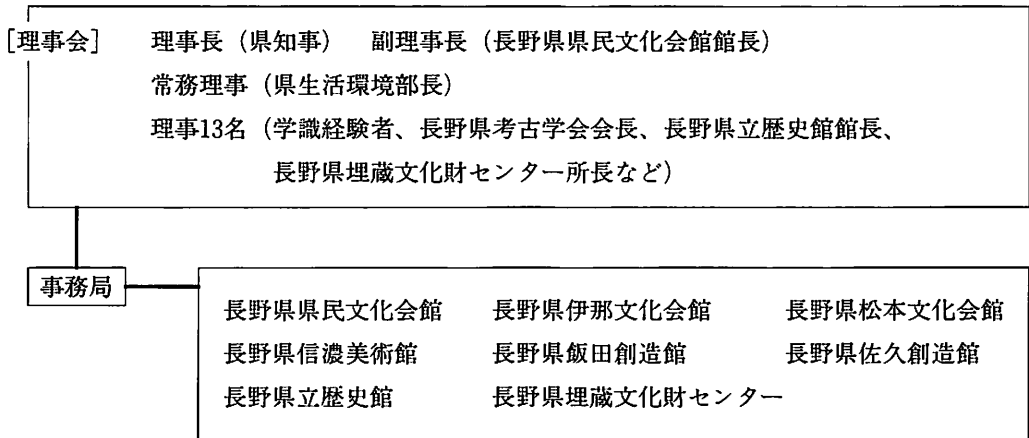
このほか当センターの内部情報紙として調査速報を4回発行した。

### III 機構・事業の概要

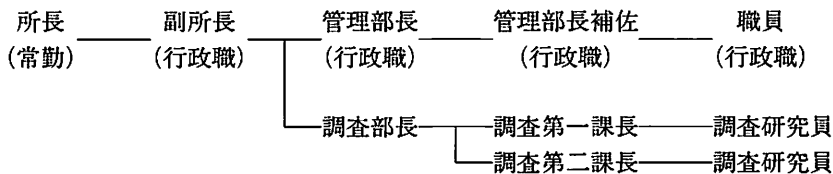
#### 1 機構

##### (1) 組織

###### ① 助長野県文化振興事業団組織



###### ② 長野県埋蔵文化財センター組織図



##### (2) 所在地

更埴市屋代清水260-6

篠ノ井整理棟 長野市篠ノ井布施高田963-4

#### 2 事業

##### (1) 調査事業

上信越自動車道にかかる埋蔵文化財の発掘調査—長野県教育委員会からの委託。国営アルプスあづみの公園にかかる埋蔵文化財発掘調査—建設省関東地方建設局からの委託。国道18号線野尻バイパスにかかる埋蔵文化財発掘調査—建設省関東地方建設局からの委託。国道474号線飯橋道路にかかる埋蔵文化財発掘調査—建設省中部地方建設局からの委託。国道403号線バイパスにかかる埋蔵文化財発掘調査—長野県土木部更埴建設事務所からの委託。国道153号線バイパスにかかる埋蔵文化財発掘調査—長野県土木部伊那建設事務所からの委託。下諏訪ダムに

かかる埋蔵文化財発掘調査—長野県土木部諏訪建設事務所からの委託。県営圃場整備事業芹ガ沢地区にかかる埋蔵文化財の発掘調査—長野県諏訪地方事務所・茅野市からの委託。県単農道整備事業及び畑地帯総合整備事業にかかる埋蔵文化財発掘調査—長野県佐久地方事務所からの委託。発掘調査技術指導—浅科村からの委託。調査課職員の派遣。出土遺物の保存処理事業—明科町教育委員会及び塩尻市教育委員会からの委託。

#### ア 調査遺跡および調査面積

○国営アルプスあづみの公園関係	大町市地域内 1 遺跡	4,000㎡
○国道18号線野尻バイパス関係	信濃町地域内 4 遺跡	11,860㎡
○国道474号線飯喬道路関係	飯田市地域内 1 遺跡	22,500㎡
○国道153号線バイパス関係	箕輪町地域内 1 遺跡	900㎡
○下諏訪ダム関係	下諏訪町地域内 1 遺跡	72㎡
○県営圃場整備事業芹ガ沢地区関係	茅野市地域内 1 遺跡	21,240㎡
○県単農道整備事業関係	浅科村地域内 1 遺跡	1,400㎡
○畑地帯総合整備事業関係	南牧村地域内 1 遺跡	63㎡

#### イ 整理事業

- 上信越自動車道関係 小諸市・更埴市・長野市・信濃町内、22遺跡の整理事業
- 国道403号線バイパス関係 更埴市内 1 遺跡の整理事業
- 県単農道整備事業関係 浅科村地域内 1 遺跡の整理事業

#### ウ 保存処理事業

- 明科町内出土金属製品 94点
- 塩尻市内出土金属製品 4点

#### エ 職員派遣

- 飯田市、原村、木曾広域連合より要請を受け、埋蔵文化財発掘調査関係の業務のため、調査課職員を1名ずつ派遣

#### (2) 事業費

上信越自動車道関係：417,062千円、国営アルプスあづみの公園関係：44,186千円、国道18号野尻バイパス関係：181,699千円、国道474号飯喬道路関係：71,962千円、国道403号バイパス関係：2,457千円、国道153号バイパス関係：5,920千円、下諏訪ダム関係：1,891千円、県営圃場整備事業芹ガ沢地区関係：120,291千円、県単農道整備事業関係：13,687千円、畑地帯総合整備事業関係：3,990円、明科町内出土遺物保存処理事業：3,900千円、塩尻市内出土遺物保存処理事業：1,080千円、発掘調査技術指導関係：1,272千円

#### (3) 普及活動 (28ページ参照)

#### (4) 職員研修

#### ア 講師招聘および来所による指導・講習会等 (30ページ参照)

イ 奈良国立文化財研究所関係

期 日	日数	課 程	参加者
12/ 2 /24～ 2 /29	4	生産遺跡調査課程	上田 真

ウ その他の学会関係研究会・研修会・講演会

期 日	発表者	内 容
11/ 7 /24	川崎 保	「ロシア極東考古学資料調査」日本ユーラシア協会長野大会
11/ 8 /20	西山克己	「渡来文化の受容と展開」第46回埋蔵文化財研究会
11/ 9 /26	鶴田典昭	「高丘丘陵の須恵器窯跡群の調査」信濃国分寺資料館市民講座
11/10/23	大竹憲昭	「旧石器時代遺跡群の形成と集落の景観」岩宿フォーラム
11/11/28	川崎 保	「玦状耳飾りについて」長野県考古学会秋季大会
12/ 1 /29	川崎 保	「チョルタビ・ヴァロータ洞穴出土資料」北アジア考古学調査会
12/ 1 /29	青木一男	「中部高地型甕と外来土器の動向」東海考古学フォーラム
12/ 2 /11	柳沢 亮	「茅野市長峰遺跡の調査」諏訪考古学研究会
12/ 2 /28	青木一男	「長野盆地の弥生社会」飯田市上郷考古博物館講演会
12/ 3 / 5	青木一男	「倭国大乱期以後の長野盆地」信濃史学会春季例会
12/ 3 /24	川崎 保	「東アジア先史時代の石製装身具」北上市埋蔵文化財センター
12/ 3 /26	川崎 保	「石製装身具流通交易経路の解明」三内丸山遺跡特別研究発表会議
期 日	参加者	内 容
11/10/30～11/1	川崎 保	縄文ランドスケープ研究会（秋田県）
そのほか、各種学会・研究会・シンポジウムなどへの参加多数		

エ 県外博物館・埋文センター・遺跡等視察及び資料調査

期 日	視察・調査他	参加者
11/ 7 /17～19	青森県出来島・深浦黒曜石原産地等	大竹憲昭、谷和隆
11/ 8 / 4～ 5	米沢市教育委員会、山形県埋蔵文化財センター	寺内隆夫
12/ 2 / 3～ 5	香芝市立二上山博物館、倉敷考古館等	田中正治郎
12/ 2 / 8～10	大分県立歴史博物館、川部・高森古墳群等	若林卓
12/ 2 /24～26	酒々井町墨古沢遺跡、君津市三直貝塚	柳沢亮、
そのほか、各地の博物館・研究機関などの視察・調査など多数		

オ 全埋文協などへの参加

期 日	会議名	開催地	参加者
11/ 4 /22	全埋文協中部北陸ブロック連絡会	名古屋市	山崎悦雄、小林秀夫
11/ 6 /10～11	第20回全埋文協総会	山形市	佐久間鉄二郎、池田浩之
11/10/ 7～ 8	全埋文協研修会	守山市	小林秀夫、宮島孝明、土屋積
11/10/14～15	全埋文協中部北陸ブロック コンピューター等研究委員会	長野市	佐久間鉄二郎、小林秀夫
11/10/21～22	全埋文協中部北陸ブロック連絡協 議会	富山市	池田浩之、大竹憲昭ほか 百瀬長秀、長浦忠雄
11/11/10～11	関東甲信越静地区埋蔵文化財行政 担当者会議	足利市	百瀬長秀、川崎保

11/11/18～19	関東甲信越静地区埋蔵文化財担当者会	伊香保町	町田勝則、白居直之、柳沢亮
-------------	-------------------	------	---------------

#### カ 県内市町村および関係機関への協力・指導等

期 日	市町村等	協力・指導内容	協力者
11/4/1～	国立歴史博	特定研究共同研究員	水沢教子
11/4/1～	長野市	市史編纂専門部会	市川隆之、大竹憲昭、河西克造
11/4/21～	中野市	高遠山古墳発掘調査指導委員会	小林秀夫、土屋積
11/6/1	飯田市	辻前遺跡出土の木製品	白居直之、賛田明、伊藤友久
11/7/10～	青森県	三内丸山遺跡特別研究	川崎保
11/9/6	長野市	史跡大室古墳群整備委員会	小林秀夫
11/11/10	小布施町	千曲川水制遺跡の調査方法	鶴田典昭
12/1/11	箕輪町	上ノ平城跡の調査	河西克造
12/1/20	松本市	御殿山城跡の調査	河西克造
12/2/5	奈文研	古代土師器の生産と流通	西山克己
12/3/8	奈文研	飛鳥池遺跡出土遺物の整理	西山克己

#### キ 平成11年度市町村埋蔵文化財担当者発掘技術研修会—長野県教育委員会・長野県立歴史館と共催

- 1 日時 平成11年11月2日(火) 13時00分～16時00分
- 2 会場 茅野市長峰遺跡
- 3 内容 ①発掘調査現場での測量 百瀬長秀調査一課長 柳沢亮調査研究員  
②発掘調査現場での安全管理 小林秀夫調査部長
- 4 参加者 82名

#### ク 資料貸し出し

期 間	遺 跡	貸し出し資料	貸出先・目的
11/4/1～3/31	郷土 貫ノ木 屋代	縄文中期土器 石斧、砥石 鏡瓦、木製品	長野県立歴史館常設展示
11/6/3～2/14	聖石	縄文土器・翡翠製品・土偶	発掘された日本列島巡回展
11/7/27～8/24	松原	皇朝十二銭	飯田市美術館企画展
11/7/27～10/8	貫ノ木	石斧、砥石、ナイフ型石器等	明治大学考古学博物館企画展
11/8/28～9/19	屋代	木製祭祀具	発掘された日本列島長野展
11/9/30～3/31	日向林B等	砥石、石斧等	東京国立博物館
11/10/2～11/14	日向林B等 松原	石斧、台形石器等 弥生土器・石器	飯田市上郷考古博物館企画展
そのほか写真等の貸し出し多数			

#### ケ 同和研修

期 日	研修名	会 場	参加者
11/12/2	部落解放県民大会	長野県民文化会館	賛田明
12/1/27	第37回長野県部落解放研究集会	上山田文化会館	宮島孝明、西香子

平成11年度役員及び職員

理事・所長	佐久間鉄四郎					
副所長	山崎悦雄					
管理部長	山崎悦雄（兼）			調査部長	小林秀夫	
管理部長補佐	宮島孝明					
職員	長浦忠雄（主任） 池田浩之（主任） 青木雄一（主事）					
調査課長	百瀬長秀 土屋積					
調査研究員	青木一男	市川桂子	市川隆之	伊藤友久	上田典男	上田 真
	宇賀神誠司	白居直之	白田広之	大竹憲昭	河西克造	川崎 保
	桜井秀雄	田中正治郎	谷 和隆	鶴田典昭	寺内隆夫	鳥羽英継
	賛田 明	西 香子	西鳴 力	西山克己	広田和穂	藤原直人
	町田勝則	水沢教子	宮島義和	柳沢 亮	若林 卓	
調査員	徳永哲秀 中島英子 西鳴洋子 山崎まゆみ					

長野県埋蔵文化財センター年報16 1999

発行日 平成12年3月31日

編集発行 (財)長野県文化振興事業団

長野県埋蔵文化財センター

〒387-0007 更埴市屋代清水260-6

TEL 026-274-3891

印刷 信毎書籍印刷株式会社

〒381-0037 長野市西和田470

TEL 026-243-2105